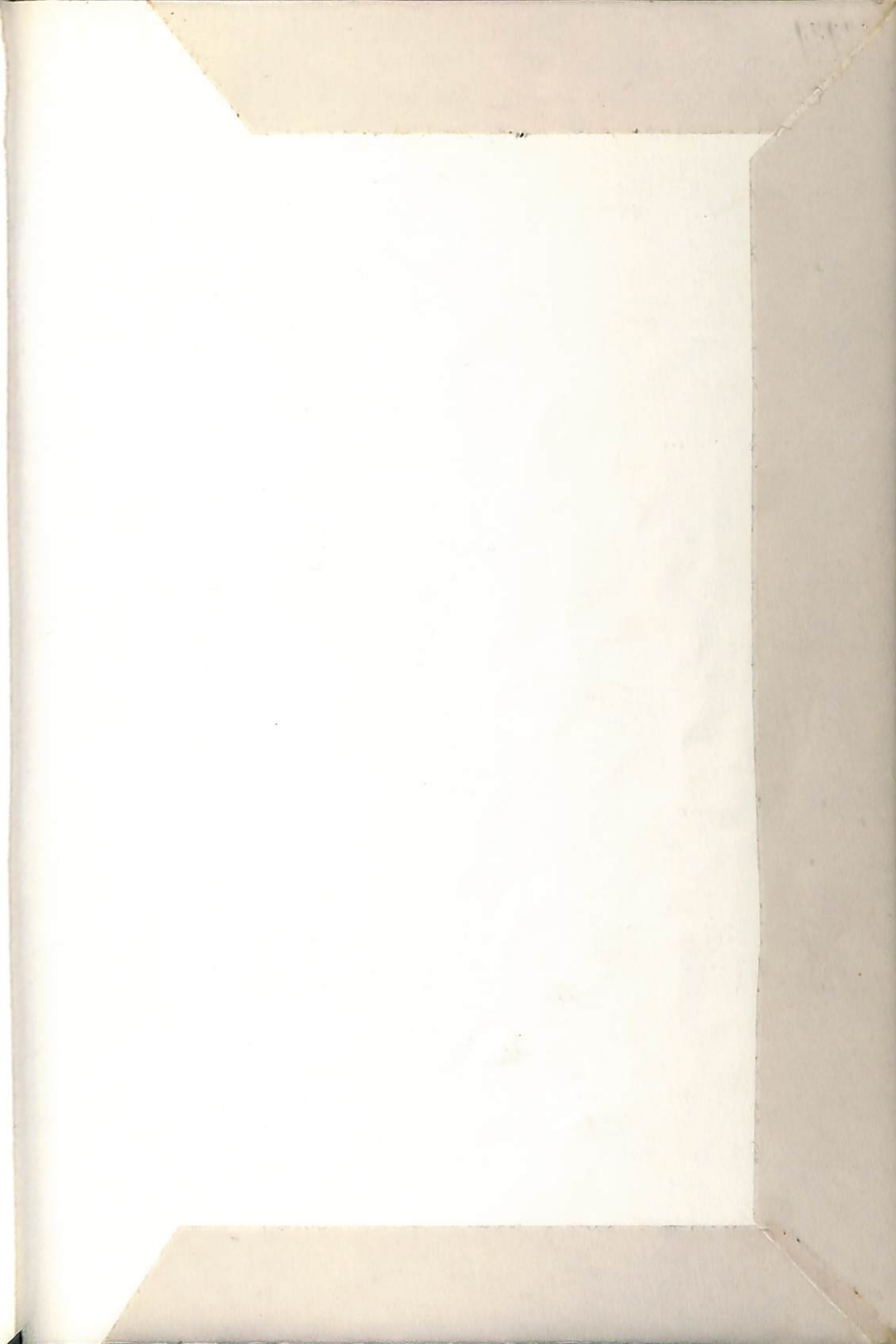


すみだ ゆかりの作家





は　じ　め　に

墨田区は庶民のまちとして伝統的な下町文化を育んできました。こうした歴史と風土の中で、多くの作家たちがこのまちに住み、このまちを愛し、このまちなかかわりのある優れた作品を生み出しました。この小冊子は「社会教育だより　すみだ」の中で紹介した26人の作家たちとその作品をまとめたものです。区民の皆さんが、多様化した現代の日々の生活に潤いと活力を得ることができれば幸いです。

昭和五十九年三月

墨田区教育委員会

目

堀	辰雄	1
富田	木歩	3
早乙女	勝元	5
幸田	露伴	7
芥川	龍之介	9
舟橋	聖一	11
伊藤	左千夫	13
森	鷗外	15
幸田	文	17
芥藤	緑雨	19
中山	義秀	21
久保田	万太郎	23
佐多	稲子	25

次

永井	荷風	27
芝木	好子	29
安藤	鶴夫	31
高見	順	33
椎名	麟三	35
正岡	子規	37
宇野	信夫	39
谷崎	潤一郎	41
吉行	淳之助	43
尾崎	士郎	45
北原	白秋	47
圓地	文子	49
林	芙美子	51

堀 辰 雄

『これは私が小学三、四年のころの話である。』

私の家からその小学校（註・牛島小学校―廃校）へ通ふ道筋にあたつて常泉寺といふかなり大きな古い寺があった。非常に奥ゆきの深い寺で、その正門から奥の門まで約三、四町ほどの間、石塋が長々と続いてゐた。

そしてその石塋の両側には、それらに沿ふて、かなり広い空地が往来から茨垣に仕切られながら、細長く横たはつてゐた。その空地は子供たちの好い遊び場になつてゐた。そしてその空地で遊ぶ分には、誰にも叱られなかったが、若し私たちがその奥の門から更に寺の境内に入つて、其処のいつも常目の見えるほどに綺麗に掃除されてゐる松の木の周りや、鐘楼の中、墓地の間などを荒し廻つてゐるところを寺の爺にでも見つからうものなら、私たちはたちまち追い出されてしまふのだつた。…略…『墓碑の家』から

辰雄は、牛島小学校に明治四四年入学、大正六年卒業、府立三中（現両国高校）入学、さらに中学四年で第一高等学校理科乙類に進学しています。（一般には

中学五年で入学する。四年入学は秀才とされた）

多くの作家は少年期から文学に親しむのに、彼は中学時代には数学を好み、蘆花・藤村・鏡花などの小説を少し読んだだけでした。しかし一高で神西清を知り、終生文学的交友を続け、その影響もあつて、ツルゲネフ、ハウプトマン、シュニツレル等の小説、戯曲をはじめに、漸次フランス象徴派の詩人の作品に親しむようになり、ショウベンハウエル、ニイチュなどの哲学書にも接します。ここで、辰雄の出生について少しふれましょう。堀浜之助は広島藩の士族で、維新後上京、裁判所に勤めていました。国許に病身の妻を残しており、勿論子どもはありません。辰雄は、この浜之助を父、西村志氣を母として明治三七年二月二八日麹町区平河町に長男として誕生。このことについて彼は『花を持てる女』の中で次のように書いてます。

『さういふ年も身分も違ふその浜之助といふ人に、江戸の落ちぶれた町家の娘であつた私の母が、どうして知られるやうになり、そしてそこにどういふ縁が結ばれて、私といふものが生まれるようになったか、さういふ点は、まだ私はなんにも知らないのである。…略…』

明治三十九年、浜之助の妻が上京してくる事になり、志気は辰雄を連れて平河町の家を出て、向島小梅町の志気の母と暮します。その後、辰雄を連れて、向島須崎町の彫金師上条松吉と結婚、松吉は大変辰雄をかわいがりました。辰雄は、松吉が死ぬまで実父と信じきっていました。辰雄夫人多恵は『蓮の花』にこんなふうに書いています。

『向島の家はなつかしい。今は建て直してしまっすっきり外観を異にしましたが、あの竹の植わっていた小さい玄関―辰雄はそんな自分の家を「雀のお宿」と呼んでいた。一坪ぐらいの小さい中庭のある四



辰雄遺愛の本棚（石川家蔵）

畳半の書齋をなつかしく思い出す。結婚する前に一度私は母とこの家に父に逢いに行った。結婚式をすませ二、三日してから私たちは二人でこの家にもどった。中略：私が忘れられないのは、風呂屋へいった経験のない私のために、私だけのための風呂桶を買い、急ごしらえの風呂場にすえつけてくれたことだ。父も辰雄も銭湯にゆく、私は朝から手ぬぐいをぶらさげて銭湯にゆく父や辰雄にびっくりした。』

辰雄は、学生時代から胸を病み、作家活動のほとんどは、軽井沢や信濃追分での療養生活の中で進められました。それだけに彼の作品には死と生の問題が重要な主題として流れています。

なお、王朝文学にも心を寄せていた彼は、男に忘れられながらも終生夢と愛を失わなかった日本の古い女性達の姿を現代に甦えらせて『かげろふ日記』等を書いていきます。

また『菜穂子』は数年かかって一人の女性の悲劇的運命を描いた作品で、短編小品の多い彼の作品の中では唯一の本格的長編です。独特な知性と叙情の融合のうちに人間の孤独と愛と死を描いて孤高の文学の世界を築いている傑作です。

富田 木 歩

区内に歌碑や句碑の多いことは有名で、それはかつての墨田の風景が美しく、情緒豊かであったことの證であり、江戸の頃から既に多くの文人墨客がこの地を訪れていたことも語っています。木歩はこうした風土

が生んだすばらしい俳人で、俳句界の啄木とも呼ばれています。彼は明治三〇年向島小梅町の鰻屋に生まれました。本名は一です。出生の頃家は既に貧しく、二才の時両脚の自由を失い、小学校にもいけず悪童どもにからかわれ、口惜しい思いを重ねました。そうしたこともあって、ひそかに自分で木製の脚を作って歩こうと試みますが失敗。このことから木歩と自ら号しました。明治四〇年夏の大洪水で家財を失い、二人の姉は苦界に身を沈め、その金で父母はようやく鰻屋を再開しますが、四三年再び大洪水にあい、一家は再起不能となります。墨東地区をししば襲った洪水の爪跡の鋭さの一端をここに見る思いです。学校に上れなかった木歩は、いろは歌留多やめんこをひとり遊びながら、その文字を暗記することから勉強を始め、一〇才

の頃にはもう古雑誌などが読めるようになります。

大正二年、一七才の時、友禅型紙彫刻師に徒弟奉公しましたが、兄弟弟子にいじめられてすぐやめてしまいます。この初めて自分の家を離れた孤独の心を惹きつけたのが俳句でした。やがて俳句誌「ホトトギス」を知り、俳句を本格的に学びます。

大正四年には、貧窮の家に自ら「小梅吟社」をつくって、近所の俳友と句作を楽しむようになります。

木歩は人形のヘチ取りという内職をしていましたが、生活はいよいよ苦しく、妹は女工となり、口のきけない弟も人形の内職を手伝いました。こうした中で、彼は「やまと新聞」の俳壇の選者臼田亜浪を知って師事し、命を削るような木歩の句は、ようやく陽の目を見はじめました。なお、後に渡辺水巴の指導も受けます。俳句の方では、木歩の存在は確かなものになっていきますが、家庭的な不幸はさらに重なり、妹も弟も肺を患って死に、自身も感染します。

。かそけくも咽鳴る妹よ鳳仙花

。床ずれに白粉ぬりし牽牛花（朝顔）

。犬猫と同じ姿や冬座敷

一九二一年から、知友の援助で向島の商売女を相手

に貸本屋を始めていましたが、今度は自分を看病する老母が脳溢血に倒れてしまいました。

母のみとりに仏灯忘る宵の冬

一九二二年二七才となった木歩はそれまで世話になっていた姉と別れ一月に須崎（現向島）の方へ移りました。木歩はそこで句作だけでなく評論の方にも活躍しながら貸本屋を続けましたが、九月一日突如として関東大震災に襲われました。彼の最もよい理解者であり、後援者であった俳人新井聲風が彼の身を案じてかけつけました。身辺に迫る火焰の中を聲風は木歩を背負って、墨堤を必死に逃げていきましたが、枕橋あた



木歩句碑（在三囲神社）

りで猛火に囲まれてしまいました。橋は焼け落ち、船もなく、避難者の荷物にまで火がつくという有様で、意を決した二人は熱風の中で堅い握手を交わして別れました。薄幸の俳人木歩の終焉でした。今このあたりに区の標識が建てられています。なお、木歩の句碑が三囲神社に、墓は江戸川区の最勝寺にあります。

木歩『小さな旅』から

『今日は快晴である。そのためか鶯（うすう）の声をきかない。姉の命によって唐紙を張る。親骨を皆ませて仕舞ったので立て付けの終ったのは日没の太鼓が鳴り渡る頃であつた。姉と妹とが銭湯へ出かけた留守の独り居が徒然（つれづれ）なので、節句にととのえたと云う雛（ひな）人形を見せて貰うことにした。』

「箱を出る顔忘れめや雛二対 蕪村」

の句を口ずさみながら塵にまみれた箱の蓋を開けて見ていると良さんが迎えに来た。姉も妹も帰ったので、別れを告げて傳上の人となった。晩春の隅田川を眺めるために傳は堤へ上った。その辺にまだ妹が佇（たずむ）んでいるものと思つて四顧したけれども見えない。夜のお稽古にでも行つてしまったのであろう。何となくもの淋しさを覚える。対岸には夕焼の残映が漂っている。略』（註・傳とは人力車のこと）

早乙女勝元

今まで御紹介した堀辰雄、富田木歩は、いずれも故人ですが、早乙女勝元は作家として、リポーターとして現在活躍中です。T・Vなどで視聴されている方も多いと思います。彼は極めて貧しい中で育ったようで、そのことは著書の中でくわしく述べています。教科書すら満足に買えず、友だちのものを覗き見したり、借りたりといった苦勞をしました。そのため勉強も思うにまかせず、成績は全く不振だったと述べています。勿論、作品の中ですから、ストレートには信じられぬとしても、随分苦勞したようです。長じては労働者として生活しながら、作家として活動するという異色のスタートでした。彼は東向島三丁目にかけて住んでいたこともあり、その作品の素材として墨田での生活が取り上げられています。『下町の故郷』という作品の一部を御紹介しましょう。

『こうして、たった一つ、さいごに残された“家”を二足三文で売りとばし、私たち親子四人が向島の町にやってきたのは晩秋とはいえ、もう薄氷さえはりつ

めた十一月の末のことだった。大つぶの雨が、ボタボタと底がぬけたようにふりつづいて、荒川放水路の水が黄色くよどみがかったその日。私が教室から出てくると、職員室の横に兄がたっていた。両手にふきかける兄の息が、ハアハアと白いかたまりになって宙をおよく。

「勝元、いくんだ」

兄はぼそんといった。

「どこへ？」

「あたらしい家さ」

兄は私をつれて、家と反対がわに堀切駅に向って大またに歩きだした。

「家にはゆかないの？」

「ああ、もうなんにもないでな」

ひとことそういっただけで、兄はだまって歩いたが、駅の前のやたい店で、ヤキ大福を二個買い求めるとその一個を私の鼻先につきつけて、

「食え！」

といった。…中略… 堀切駅から一ツ二ツとかぞえて、三つめの曳舟駅でおきて、メタンガスのわくまっくろなドブ川にそい、雨のぬかるみの道を歩くこと十

二、三分で、私と兄は「あたらしい家」にたどりついた。…中略… 転校した第三寺島小学校は、茶色のコンクリートづくりの「西洋式」で、柳原(註・足立区)の学校みたいにかたむいていることもなく、窓ガラスなんか、まるで透明な空気のように。―これはなにからなまでに素晴らしいところに来たものだ、私は身体中で感激した。…略…」

向島が今のように整然とした市街地となる前の庶民の街の姿が、たびたび彼の作品の中に描かれています。そこには場末の町の哀歎がしみじみとにじみ出ていて、読む者の胸に迫ります。また彼は戦火に焼かれ、業火

に追われる人々の姿を克明に描きあげ、

戦争の恐しさ、悲しさを読む

人の心に刻みつけています。

そういった彼の作品からも

う一つ。



勝元が在学した墨田区三寺小

『わが街角』から

『街角』

ひとことでもいいってしまえばそれっきりのものかも知れないが、街角、まちかど……とつぶやきながら、その言葉の余韻をたしかめていくと、あの街角、この街角と、そのときどきの生活のにおいが、さまざまに記憶となって、勝平の胸の内からこみあげてくる。…中略…

それは、勝平がいわゆる「町育ち」で、東京の場末、隅田川と荒川放水路とはさまれたデルタ地帯に育って、屋根と屋根とがひしめきあったすえくさい路地裏から、ほとんど外に出ることがなかったことがあげられよう。いや自分から出なかったのではない。出るゆとりがなかったというのが、ほんとうなのだ。すべて貧しさのなせるわざである。…中略…

向島区立西部国民学校は、正門をくぐるとすぐ鼻先に、コンクリート造りのトーチカのような建造物があった。奉安殿である。チリ一つない植えこみの中に傲然と屹立したそれは、まだコンクリートの肌も純白に輝き、陽光をはねかえして目に痛い。…略…(註・奉安殿には天皇・皇后の御写真と教育勅語が格納されていた)

幸田露伴

露伴は生粹^{きずい}の江戸っ子です。下谷三枚橋横町（下谷区練堀町）の俗称新屋敷で生まれたのが、慶応三年（一八六七）といえますから、まさに明治維新草創の時、新日本誕生と時を同じくしたと言えます。父成延^{しげのぶ}、母猷^ゆの四男で、幼名を鉄四郎、のち成行^{なりゆき}といい、露伴と号しました。おもしろいことに露伴が生まれた年には夏目漱石、正岡子規、尾崎紅葉、斎藤緑雨、芳賀矢一など、明治文壇に大きな足跡を残した人々も生まれていることで、何やら因縁めいたものを感じさせます。幸田家は代々幕臣で、表お坊主でした。父成延は奥お坊主の家柄の今西家からの入りむこで、法制や典故にくわしく、学芸にも縁が深かったのです。露伴は勿論、弟成友が歴史学者で文学博士、妹延はピアノ、幸はヴァイオリンの名手であったことにそうした血統の重さを感じます。こうした由緒ある家柄に生れたのですが、幸が不幸か時代の一大変革期にあったため、せっかく入学した府立第一中学校を中退せねばならぬような苦しい経済状態でした。やがて一七才の時、給費

生として芝汐留の電信修技学校に入り、一八才の時北海道へ赴任することになりました。東京は勉学のためにも離れたくなかったようですが、官費生には、そんなわがままは許されません。孤独な日々を携えていった漢籍や仏教書、文学書などで慰めながら、積極的に土地の生活上のために尽しました。しかし、中央での文学界の華々しい展開の情報は、彼の若い心に動揺を与えずにはおきません。こうして実社会に触れて人生経験も深め、自分の内面的葛藤を重ねる間に、ようやく文学的内実が養われ、高められていきました。

ついに二一才の八月二五日、ひそかに任地を脱出、官を棄てました。『身には疾あり、胸には愁^{うれ}あり、悪因縁は逐へども去らず、未来に楽しき到着点の認めらるるなく、目前に痛き刺激^{しげき}物あり、欲あれども銭なく、望みあれども縁遠し、よし突貫して此逆境を出でむと決したり……略……』と『突貫紀行』に書いています。函館で追手につかまり説諭されたが応じませんでした。青森からは路銀に困りながらも辛苦に堪えて郡山まで歩き続け、夜は宿に泊るどころか、食べることさえことかく始末でした。

里遠し いざ露とねん 草枕

芥川龍之介

『此の大川の水に愛撫される沿岸の町々は、皆自分にとって忘れ難いなつかしい町である。吾妻橋から川下ならば、駒形、並木、蔵前、代地、柳橋、或は多田の葉師前、うめ堀、横網の河岸——何処でもよい。是等の町々を通る人の耳には、日をうけた土蔵の白壁と白壁との間から、格子戸づくりの薄暗い家と家との間から、或は銀茶色の芽をふいた柳とアカシアとの並木の間から、磨いた硝子のやうに、青く光る大川の水は、その冷な潮の匂と共に、昔ながら南へ流れる懐しいひびきをつたへてくれるだらう。ああ、その水の声のなつかしさ。つぶやくやうに、すねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼった青い水は、日も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗ってゆく……略……』

これは芥川の小説『大川の水』の一節で、彼がどんなに大川——隅田川を愛し、下町を愛したかを物語っています。もっとも今の隅田川を見たら何といえますか。

芥川は、明治二五年三月一日、東京市京橋区入船町八丁目（現中央区明石町）に牛乳搾取業を営む新原敏

之、ふくの長男として生まれました。辰年辰月辰日の辰刻に生まれたのにちなんで、龍之介と命名されたといえます。生後七ヶ月目に母ふくが発狂したため、母の長兄芥川道章（本所区小泉町一五——現両国三丁目二番石井釣具店あたりに住む）に引き取られました。

芥川家は旧幕臣の名家でした。芥川家では文学・美術を好み、道章は俳句や盆栽に親しむとともに南画をたしなみ、一家を挙げて一中節を習い、歌舞伎をよく観に出かけるなど、下町的な江戸趣味の濃い家庭でした。

五才の時、江東尋常小学校付属幼稚園（回向院に隣接）に入り、翌年小学校に入学しました。龍之介は家の本箱にあった『西遊記』の翻案『金毘羅利生記』や『水滸伝』などを愛読していましたが、小学校に入った頃から近所の貸本屋をはじめ、大橋図書館などへ通い、馬琴・近松などの江戸文学や泉鏡花や徳富蘆花、尾崎紅葉などの作品を多く読みました。こうした本に對する情熱は、やがて読むことから作ることへ転じ、十才の四月頃から同級生等と回覧雑誌「日の出界」を発刊表紙絵やカット等をかいて自ら編集にあたり、溪水、龍雨などの筆名で多くの文章を書いています。

こう書いてくると、龍之介は幼い頃から作家を志し

ていたようですが、一八才頃は歴史家志望でした。も
っとも同じ頃、イプセンやアナトール・フランスなど
の外国文学も辞書を片手に読んだり、漢文を勉強し、
時に七言絶句の漢詩を作ったりしました。

府立三中、第一高等学校、東京帝大と順調なコース
を進みましたが、二三才の時松江に遊び、はじめて芥
川龍之介の署名で『松江印象記』を書き『羅生門』を
発表しましたが、まだ世評には上りませんでした。や
がて友の紹介で、久米正雄と「漱石山房」の木曜会に
出席し、以後漱石の門に入りました。二四才の十月、
当時文壇の登龍門といわれた中央公論に『手巾』^{はんちゆ}を発



龍之介出生地（築地明石町）

表。「此の頃、僕も文壇へ入籍届だけは出せました」
と自ら語るところまで認められてきました。三五才の
七月二三日『続西方の人』を書き上げた後、二四日未
明に自殺します。死の前夜『自嘲 水涕や鼻の先だけ
暮れ残る』と書いた短冊を伯母ふきに渡し、下島勲に
届けるよう依頼しています。染井の慈眼寺に葬られま
した。彼は好んで河童^{かわこ}の絵をかいたことから命日は河
童忌の名で営まれています。

彼の作風には、メリメ、アナトール・フランスなど
外国作家の影響のほか、鷗外の歴史小説や翻訳と、漱
石の感化が強いといわれています。日本の古典、こと
に今昔物語やキリシタン文学などに素材を発見し、そ
れに近代的主題、特にエゴイズムを中心とする人間性
を見るとともに、それを乗り越える殉教的感激、芸術
至上主義的情熱に興味を寄せました。

彼は、その中広い教養と豊富な語いによって、す
きのない洗練された文章を書き上げています。勿論詩
や俳句、随筆、評論にも多くの秀作を遺しています。

舟橋聖一

『花の生涯』は舟橋聖一としては珍しい本格時代小説で、NHK大河ドラマとしても絶讃を博したすばらしい作品です。これについて十返肇氏は次のように書いています。

『政治のうずりに巻きこまれるのをきらって、自ら埋木舎と称する庵に閑居していた井伊直弼が、やむなく彦根藩主となり、大老となり、国家のために開国を主張した結果、ついに桜田門外に暗殺されるまでの生涯を腹心長野主膳と女間諜たか女をあしらって円熟した筆致で展開している。作者は史実とエロティシズムを交互に組合せながら、読者の興味をつつてゆく。その呼吸はまことに心得たもので、今さらながら私は彼の技巧に感心した……略……』

さて、その『花の生涯』の書き出しです。

『長い雨季の終り。

夕空は久しぶりに伊吹の山頂までくっきり晴れわたって見えたが、芹川の水は、見違えるほど水嵩を増していた。岸から二尺あるかないかで、水勢はいつにな

く鋭い……略……』

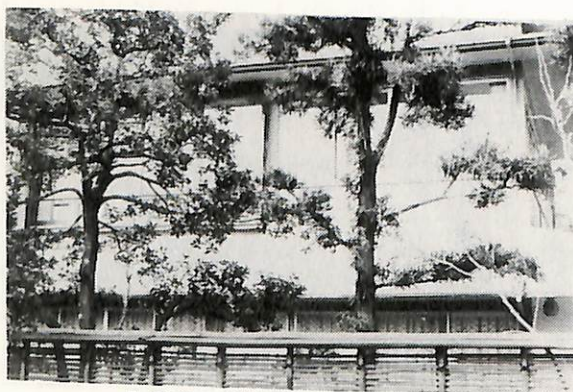
舟橋聖一は、墨田区横網一番に舟橋了助、さわ子の長男として明治三七年二月二五日に生まれました。クリスマスにちなんで聖一と命名されましたが、この頃にこうした名前をつけるというところに、彼の家庭の新しいさが感じとれます。なお、父は東京帝国大学工科大学教授、母は古河合名会社（当時の有名企業）理事長の長女という恵まれた家庭環境でしたが、生後間もなく百日咳にかかり、以後喘息性アレルギーが持病になりました。生家の筋向うに相撲の友綱部屋があり、早くから相撲に親しみました。多忙の身で横綱審議会委員長まで引受けたこともなるほどとうなずけます。もっとも彼は実に多くのことに関係しています。作家関係は別としても、文部省国語審議会委員、農林省競馬運営審議会委員、内閣社会開発懇談会委員、長唄青楓会々長等多種多彩です。なお、彦根名誉市民第一号に『花の生涯』のゆかりで迎えられたことも特記しておきます。さて、彼の人間と文学を知るために八木義郎氏の文の一部を引用させていただきます。

『舟橋さんは酒を飲まない。酒の酔いを知らない。おそらく女にも酔わない。あそびにも酔わない。舟橋

さんはいつも素面で、いつも正気でいつも本気だ。その舟橋さんの中から、どうしてあれらの美の醗酲者、愛欲の錯乱者、女体への狂熱者たちが生まれるのであろう。…中略… 私自身勝手に次の様に考える。酒に酔わず、女に酔わず、遊びに酔わぬ舟橋さんにとって、たった一つだけ酔えるものがある。それがすなわち文学というものだ、と。いや舟橋さんは、この文学とい

う表現形式を通じてはじめて、酒に酔い、女に酔い、遊びに酔うことができる人なのだ、と。…略…」

彼は小説は勿論、戯曲にも多くの傑作を残しています。いや、むしろ初めは戯曲から出発しています。旧制の



ここの二階が書斎だったとか

水戸高時代に同人誌に戯曲『歩行者』などを発表、帝大（現東大）入学の年の九月には河原崎長十郎等と劇団を結成しています。晩年の彼は眼をわずらい、心臓も病みますが、病床にあっても最後まで創作活動を続け、一九七六年六九才で惜しくも逝去しました。

『隅田川物狂ひ』から、

『大川端に住んで居ると、水死人を見るのは、別に珍しいことではなかった。紐で軀を縛り合った情死体もあれば、浪にもまれるうちに着物がずり落ちて、丸ッ裸になって浮いて居るものもある。上り下りの船の舷側にぶつかって、船頭が引き上げるのもあれば、川岸の杭に引っかかって通行人に発見されるものもある。

然し、船頭の中には、面倒臭がって、お客さまだと聞くと、舷へ流れつかないうちに棹で押し返して、知らんぷりをして漕ぎ抜けるのもありせいせい

「南無まいだ」

と口に出して言ふのは、それでも仏心のある方である。

…略…」

彼の作品中、墨田区にゆかりあるものは、この他に『川音』『隅田川』などがあります。

伊藤左千夫

左千夫は、歌人としては晩学で二八才の三月二六日付、父良作宛の手紙に、

ひたすらに我父上よ待ちはべる

都の桜 咲かんとぞせば

の歌一首を記して、ようやく歌への関心を示しはじめたのです。彼は元治元年（一八六四）、上総国武射郡殿台村（現千葉県成東町）に生まれました。家は中流上層の農家で、幼時は専ら漢籍を学びました。一八才の四月には政界人になる希望で上京し、明治法律学校に学びましたが、眼病のため修学を断念して故郷に帰りました。しかし、二二才の一月三〇日未明再び故郷を出奔、実業家になる決心で上京、神田佐柄木町の牛乳店豊功舎に勤め、八月には父宛に出奔の事情を書き送りました。その後、いくつかの牧場を転々として、二六才の四月一日には、本所区茅場町三の一八（現在の錦糸町駅前バス停あたり）に独立して牛乳搾取業を始めました。屋号は「牛乳改良舎・茅の舎、あるいはデボン舎」ともいいました。すでにそこにあった牛舎を

千円で買受け、内金二百円を支払い、残りは一、二年で返済する約束でゆずり受けたのです。当時の千円はどんなに莫大な金額かはちょっと想像が付きまします（小豆一升が六錢位で買えた。彼は當時を回想して『家庭小言』にこう書いています。

『予は殆ど毎日一八時間労働した。されば予は忽ち同業者第一の勤勉家という評を得た。』

三〇才の時、江東区白河町に住む同業の伊藤並根と親交を結び、茶の湯、短歌の手ほどきを受けます。

三二才のとき、桐の舎桂子の月例歌会に出席するようになり、

牛飼が歌よむ時に世の中の

新しき歌 大いにおくる

の歌を発表して好評をえました。三五才の一月一日、新聞「日本」に子規による第一回募集歌、新年雑詠が発表され、左千夫の歌三首が選に入りました。一月三日にはじめて子規を訪ね、七日から根岸短歌会に出席しました。四月二九日には子規の来訪を受け『草花日記』をはじめ「ホトトギス」にのせました。根岸短歌会の同人との交友が広がり、歌壇的にも次第に認められていきました。こうして子規に師事して心から尊

敬するようになり、歌に写生文に強くその影響を受けるようになり。子規没後は、根岸短歌会機関誌「馬酔木」を創刊、発行所を自宅におきました。その後「アラギ」を創刊、斉藤茂吉等多くの著名な歌人を門下から出しています。一方、小説や写生文にも力をつくし、四一才の処女作『野菊の墓』には淡い清純な感傷と抒情とがあり、左千夫らしいひたむきさが感ぜられます。この作品に

対して、夏目漱石から激賞の手紙を受けますが、斉藤茂吉も高く評価しています。この『野菊の墓』の文学碑が葛飾区の矢切渡しの松戸市側にあります。墨田区に住んだだけに、左千夫もしばしば水害に見舞われまし



錦糸町駅前の歌碑

た。その体験から生まれた歌数首をかかげましょう。

明治三八年の出水の際

○水づく里 人の音もせず さ夜ふけて

唯こほろぎの鳴きさぶるかも

同四〇年八月床上二尺の浸水にあい

○水やなほ 増すやいなやと 軒の戸に

目印しつつ 胸安からず

同四三年八月の大洪水に

○水害の のがれを未だ かへり得ず

仮住の家に 秋寒くなりぬ

○闇ながら 夜はふけにつつ 水の上に

たすけ呼ぶ声 牛叫ぶ声

こうして歌に、文に大きな業績を遺して左千夫は、五一才の若さで世を去りました。今、亀戸天神裏にある普門院善応寺に眠っています。また、錦糸町駅前の彼の旧居跡には昭和五八年に歌碑が建てられました。

左千夫は、短歌の本質を剝那の感動の直接的表現、すなわち「叫び」であると主張しましたが、歌風は大柄で、主観のひびきの強い、声調豊かな万葉ぶりであると評されています。

森 鷗 外

鷗外を語るとき、どうしても次の三つのことは落せないと思います。

その一つは、鷗外は一二代も続いた津和野藩（現島根県）御典医という由緒ある森家の長男、林太郎として生まれたことです。封建社会では、長男を特に重んじ、弟妹とは別格として扱いました。森家も同じことでした。彼は五才で儒学者米原綱善（よねはつなえ）について四書五経を学んでいます。こうしたことから、彼は嫡男意識が強かったと言われ、そのことは小説「舞姫」にもうかがわれます。

その二つは、文久二年（一八六二）十一月に生まれた彼は、幕末から明治にかけて大きく時代が転換する激動期に幼時を過したことです。山間の小藩の城下町津和野にもあわただしい変革の波が押しよせ、彼の幼い心にさまざまな影を落していったことは否めません。ことに明治新政府のキリシタン弾圧で、長崎のキリシタン信徒の一部が津和野に移され、酷い迫害を受けた事実は、心理的に大きなショックであったと思います。

その三は、東京大学医学部を二〇才という記録破りの若さで卒業して軍医となったことと、間もなく医学研究のためドイツ留学を命ぜられたことです。それは一八八四年といえますから、日本が西欧文明吸収に大わらわになっていった時代で、実際ヨーロッパの地を踏んで勉強できたということは、単に医学面だけでなく思想的にも、文学的にも大きな収穫があったと思われます。それは四年の留学を終えて帰朝すると、翌年雑誌「しがらみ草紙」を創刊し、西洋の美学、文学論を基準として当時の雑然とした文学界の清澄を期したという文学に対する啓蒙運動にもうかがえます。勿論、医学については、「衛生新誌」「医事新論」などを帰朝後続々と創刊し、西洋医学、実験医学だけを真の医学であるとし、旧来の医術、医師制度を否定した啓蒙運動を展開しています。

とにかく富国強兵に熱中した当時の政治、軍事の中にあって、軍医としての職責も立派に果しながら、文学の世界でもすばらしい業績をあげ、軍人としては珍しい文学博士になり、さらに晩年には帝室博物館長や帝國美術院長にも推されています。

ところで、鷗外は一一才の時、父と上京、向島小梅

(向島一丁目あたり)の旧藩主の亀井家の下屋敷に足を止め、やがて曳舟通りに小さな藁屋根の家を父が求めて、後から上京した家族と一緒に住みました。鵠外の妹、小金井喜美子は、この家のことを『森鵠外の系図』にこう書いています。

『軒にかけてある樋は大竹の二つ割で、あまだれの落るあたりには、御影の小さい円石が敷き詰めてあった。此庭を築いた隠居は、所々から珍しい木石を集めて来て、それを引き入れる人夫の木遣歌を聞くのを楽しみとして居たようである。裏庭は梅林で花の盛は見事であった。…略…』

鵠外は上京した年の秋には、本郷、岐坂の進文学社に入社しドイツ語を学びました。向島からの通学は不便なため、神田小川町の西周邸に寄寓しました。周



鵠外の生家

は幕末にオランダへ留学、日本に初めて西洋諸文明を紹介した思想家として知られ、鵠外に大きな影響を与えました。

最後に鵠外の『洪江拙斎』の一節を御紹介します。

『わたくしは幼い時、向嶋小梅村に住んでゐた。初の家は今須崎町になり、後の家は今小梅町になってゐる。その後の家から土手へ往くにはいつも常泉寺の裏から水戸邸の北のはずれに出た。常泉寺はなじみのある寺である。わたくしは常泉寺に往った。今は新小梅町の内になってゐる。枕橋を北へ渡って、徳川家の邸の南側を行くと、同じ側に常泉寺の大きい門がある。』

わたくしは本堂の周囲にある墓をも一つ一つ検した。日蓮宗の事だから、江戸の市人の墓が多い。知名の学者では朝川善庵の一家の墓が本堂の西にあるだけである。本堂の東南にある末寺に、池田氏の墓が一基あったが、これは例の市人らしくかも知れぬ縁同様のものと見えた。わたくしは再び向嶋へ往った。そして新小梅町、小梅町、須崎町の間を徘徊して搜索したが、嶺松寺といふ寺は無い。…略…』

なお、鵠外は六一才で亡くなり生前愛した弘福寺に葬られましたが、後に三鷹の禅林寺に改葬されました。

幸田 文

幸田文が露伴の次女として、明治三十七年、向島の家
に生まれた頃、父露伴はすでに近代日本を代表する小
説家であり、東洋の学芸を深く身につけた学究として
も畏敬されていました。しかも、その一族はみな一流

の人々で、いろいろな分野で活躍していました。こう
した環境は、文の精神的成長に大きく影響したに違
いありません。また、代々の下町育ちということで、生
粋の東京人の感覚の冴えを身につけています。文は数
え七才で実母を失い、九才で姉に死なれ、二三才で弟
成豊とも死別するという、或る意味では、大変肉身の
辛^{さち}薄い人でした。なお、姉が死んだ年の一月にクリ
スチャンの継母を迎えました。祖父成延が熱心なクリ
スチャンであったことから、一家は皆信者で、文はミ
ッションスクール、女子学院に学びました。継母は主婦
としては失格の人であったようで、文との間も余りし
つくりしませんでした。この関係は『みそっかす』な
どにも書かれています。そうした意味では、ずいぶん
苦勞して成人しています。なお、女子学院にはいった

年の夏休みから数年の間、父の暑中教育を受け、また、
横尾安五郎に論語の素読も受けました。さらに拭き掃
除から炊事洗濯のはてまで厳格な教育を受けました。
しかし、一方では『啐^ち啄^た』に書いているように進歩的
な性教育も受けたようで、そこには文の父に対する信
頼と尊敬の念がどんなに深く強かったかがうかがわれ
ます。

『啐 啄』から

『三十何年も前の懐しい想い出である。非常によい
天気の日で、父と私は庭のまんなかに立って、どうい
うわけだったのか、二人とも仰向いて天を見ていた。
突然に父が云った。

「おまえ、ほら男と女のあのこと知ってるだろ」

「え？」

「どれだけ知ってるかい」父は仰向いたなり笑って
いるようだった。はっとした。羞^{はか}しさが胸に來たが羞
しさに負けてうなだれてしまうような優しいおとなし
い子でもない私だった。

「知らない！」

都合のいい常用語が世の中には沢山ある。「知らない」
の通じる意味は広いのである。…略…」

文は、昭和三年、五才で酒問屋の三男と結婚、長女玉を出産しますが後、故あって離婚、娘と実家へ帰ります。以後、父と共に暮します。昭和二年に父が亡くなると、乞われて、その最後のみとりを『雑記』の名で初めて発表、時に四四才。大へん好評で、和田氏は文の文章についてこう評しています。

『文章そのものの中に発条（バネ）がひそめられていて、実体の根元を適確に射抜くことにある。この弾力（はじき）がリズムになって、活きいきとした生活感情を伝えるところに独自性がある』文は昭和二六年の冬、家をあけて四ヶ月ほど柳橋の芸者置屋へ女中奉公しました。皆



文が墨田にいた頃の墨堤風景
(鱧生画)

から離れちゃって、なにもかもほっぽり出して、ちがうところへ行きたかった」とこの時の気持を述べ、決して種とりでないことを強調しています。しかし、この生活を素材に『流れる』を書き、新潮文学賞を受賞しています。この他『闘』で女流文学賞を、創作集『黒い裾』で読売文学賞を受賞しています。

最後に『おとうと』の書き出しの一節をご紹介します。そのころの墨堤のさまを見事に描いています。

『太い川がながれている。川に沿って葉桜の土手が長く道をのべている。こまかい雨が川面にも桜の葉にも土手の砂利にも音なくふりかかっている。ときどき川のほうから微かに風を吹き上げてくるので、雨と葉っぱは煽られて斜になるが、すぐまたまっすぐになる。ずっと見通す土手には点々とかかさ洋傘が続いて、みな向うむきに行く。朝はまだ早く、通学の学生と勤め人が村から町へむけて出かけて行くのである。』

げんは割に重い蛇の目をかたげ、齒のへった歩きにくい足駄で駆けるように砂利道を行く。片側は大きな川、片側は土手下の低い屋根がならんでい、桜並木より他にもものない土手の朝である。…略…』

斎藤緑雨

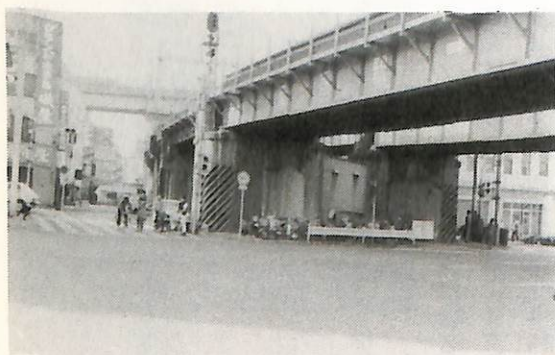
緑雨は、その辛辣な風刺的評論と江戸文学の流れを汲む最後の戯作者としての花柳風俗と男女の心理的うがちを主題とした数々の作品を残した人でした。その代表作として『油地獄』『かくれんぼ』『門三味線』などがあげられます。彼は奇行が多く、そのために誤解されたり、敬遠されることも多く、例えば明治三七年四月に肺患のため本所横網町の自宅（現在の総武線ガード付近）で死にましたが、かねて孤蝶に口述筆記させた『僕、本日をもて目出度死去仕候間、此段広告仕候也 斎藤緑雨賢』という広告を新聞『万朝報』に掲載したのも奇行の一例です。また、一生結婚せず、蓬髪、垢面―要するにボサボサ頭のあかだらけの顔で人力車を乗り廻したといえます。樋口一葉がその日記に『わる口の正太夫（註・緑雨は正直正太夫とも号した）』といい、この男かたきに取りていとおもしろし、みかたにつきなば猶さらにおかしかるべし……』と書いていますが、緑雨の一面を端的に表現していることばと云えましょう。なお、一葉が死んだ年の五月に、

はじめに一葉は緑雨を訪ねています。そして一〇月に一葉が病死すると緑雨は、葬儀万端から、遺稿出版計画まで親身も及ばぬ世話をしています。

さて緑雨は慶応三年（一八六七）伊勢国神戸に斎藤利光、のぶの長男として生まれました。本名は賢。父は津の人で、雅号を謙堂といい和歌俳諧をたしなみ、母は江戸京橋の生まれでした。一一才の時、両親と共に上京やがて父が藤堂家の侍医となったため、本所緑町三丁目（現緑小付近）の藤堂邸に住むことになりました。緑雨はこの緑町を、本所を、心から愛したので緑雨と号したといいますが、その賢にちなんで真猿と号したり、江東みどりといったこともあります。

一三、四才の頃上田万年（後年、有名な国語学者）と知りあい、互いに競って詩文を新聞に投書しました。彼は初め本所の弥勒寺橋（立川三丁目にあった）の畔の土浦藩主設立の土屋学校に入りましたが、その後、東洋小学校、江東小学校、府立第一中学、第二中学さらに明治義塾、明治法律学校（明大の前身）等を転々どれも中途退学に終わっています。しかし、年少から才気があふれほとばしり、筆力は冴え、観察は鋭く、人々を驚嘆させました。一八才の時父と親しかった其角

堂永機について俳諧を学び、その紹介で假名垣魯文の門に入り、その後魯文が今日新聞の主筆となると、その下で校正係を務めました。こうして戯作者魯文の影響も受けます。緑雨は坪内逍遙とも親交があり、また森鷗外が主催する「めざまし草」の匿名合評『三人冗語』『雲中語』でも鋭い皮肉を交えた短評をしています。なお、彼の戒名「春曉院緑雨醒客」は幸田露伴のつけたものです。このように文壇の大御所とのつながりを強くも、ちながらも、その奇行と寸鉄人を刺すていの皮肉と揶揄とによる文壇批評、文明批判を敬遠してか、当時の文壇にはあまり友人が多くありませんで



緑雨終焉の地（写真左手あたりか）

した。彼は登仙坊の筆名で『油地獄』を当時はまだ珍しい口語体の花柳小説として発表、これが出世作となりました。その一節を御紹介します。

『百花園の秋草を見に行った土産に、言問の団子を買って来て呉れたことはあったが、つひぞ是迄己むを得ぬ用事の外、冗談口一つ云ったことのない貞之進が、態々お神さんにとのことに小女も不審を立て、寝る迄の時間つなぎに、亭主の不断着の裾直しに懸って居た秋元の女房は、黒の太利とかいふ絆纏の袖口の毛繻子に褐色の霞が来て居るのを、商売柄外見なしに引被け、転宿でもなさりたいのかと、膝の上の糸屑を丸めながら二階へ登って、貞之進の部屋の前まで行けば、お這入りく〜と何日にもない愛素しいに、女房は勝手が違ったやうで却て恐縮し、御用はと恭々敷くすべり込めば、いや用ではない茶を煎れたからと、此人を見知って以来、三年越し例しない調子の軽さ、目賀田さま茶菓を賜はると秋元の年代記へ特筆せねばならぬ程の不思議に、女房は心裡で倍々疑って居たが、饒舌るを以て達辯とする隣室の五島に比べれば、口数は三分一にも足らぬが…略…』

中山義秀

「中山義秀さんなら、わたしは成田中学校在学中、英語を習いました。厳しい先生でしたよ。そう、柔道も四段くらいでしたね。」

ずっと昔をなつかしむように話してくださったのは、わたしと机を並べている加藤社教指導員でした。

「先生はその頃向島小島町に住んでおられ、早朝五時起きして成田中へ通勤しておられたようです」とも話してくださいました。今と違って国電も私鉄も不由だった昭和初期としては大変だったと思います。

義秀は昭和五年から七年まで小梅に住み、それから下谷天王寺に移りました。彼は明治三三年（一九〇〇）福島県岩瀬郡大屋村字下小屋に生まれました。父は武蔵、母はすゑ。旧水戸藩士の家柄です。大正一一年、早大英文科を卒業し、妻敏女を携えて三重県立津中学へ英語科教諭として赴任。大正一五年四月には千葉県私立成田中学に転任。この頃「早稲田文学」に『貧民回帰』などを発表、作家としての活動が盛んになります。しかし、昭和八年には成田中学を辞める羽目とな

り、奥さんは肺を病むなど、病と貧苦とにさいなまれます。やがて、奥さんは昭和一〇年に二児を遺して死去。それまでも三児を失うなど、家庭的には恵まれない暗い生活が続きます。こうしたことが、その作品に大きな影を落していることは否定できません。

昭和一三年に「文学界」に発表した『厚物咲き』は芥川賞に選ばれ、彼の作品の価値もようやく高く評価されるようになりました。その『厚物咲き』の書出しを御紹介しましょう。

『瀬谷は七十の声を無視し、最早世事一切を流れにまかした気持であながら、やはり心気とみに衰へはじめたことを感じないわけにはゆかない。頭は冴え永年手がけた仕事に何の困難を覚えるのではないけれども、ともするとはて知らぬ放心に陥ってゐる自分にしばしばおどろくことがある。七十年の生涯をふり顧つてみると溜桶の蛆虫が桶の壁をよぢ登っては落ち、汚物の中から脱けでられなかった姿の厭さが考えられる。かの悲哀とか寂寥とかいふものではなかった。自分の人生そのものが舌打ちしたいばかりいまいましたのである。…略…』

義秋の作品には、私小説と歴史小説にすぐれたもの

が多く、戦後は特に歴史小説を多く書きました。それについて彼は、こう述べています。

『私は老来、といってもまだ知命（註・五〇才）には至らないが、すでに人生の悲苦において心を過去に遊ばせることが好きになった。なまなましい事にはあまり心を惹かれない。…略…』

また、田宮虎彦氏は、義秀について次のように述べています。

『中山義秀氏の作品をつらぬいてゐる精神を、私はかつて、孤独の精神であると書いた。また、烈しい求道の精神であるとも書いた。孤独に身悶えしながら、



なお生きる道を求めつづけてゐる人の悲しみと苦しみとが、氏のすべての作品をつらぬく色調の基本であるからである…略…』最後に義秀の作品をもう一つ、『台上の月』をご紹介します。

『小梅の住居は京成電車押上駅に近い所、まはりは人形師、株屋、職工、諸種の小売店、浅草通ひの仲居女中といったたぐひの住民達で、いづれも豊かな生活をしてゐるわけではなかったが、垣根や高塀で隔絶された山手人種とちがひ、人情にあつく好感がもてた。

それよりもっと嬉しかったのは、隅田川の流れや浅草がちかく、みめぐり社や百花園をはじめ、明るくのびのびとした空氣がただよひ、昔の文人、墨客等が愛したといふ葛飾の野の面影がなほそちこちに偲ばれることであつた。

私は小梅に二年住んでゐる間に、はじめて堀辰雄をたづねた。堀は水戸侯の下屋敷跡である、向島公園端の平屋にすんでゐて距離が近かつたばかりでなく、横光や川端、永井龍男、深田久弥達が参加してゐた「文学」の同人でもあつたので、なんとなく親近さを感じてゐた。…略…』これを読んでいると、庶民の町、文学の町小梅がしみじみと偲ばれ、なつかしされます。

久保田 万太郎

『それにしても、あたりの目のさめるやうな新緑のうつくしさ。……そのあかるい光と、くらい影とにつつまれて、おれは三〇年あまりの月日のへだたりから、わけもなく引きはなされた。ときどき、おれは立留つて、空をながめたりした。

——戦争ではどうだったんです、この界限？……とおれは訊いた。

——勿論焼けたさ、空襲を喰つて……と秀さんも、ともども立留つた。

——と、これも……この庭も？……

——みるも無惨に……

——焼けたんで？

——焼けたなんて、そんなナマやさしいもんぢやない。……その時分、まだおれは東京にウロウロしてたからはうばう焼けあとを見てあるいたがこの焼けあとを見て立ったときほど胸が一ぱいになったことはなかった』

これは戦後復活の百花園を彼が『むかしの仲間』に

書いたものです。なお、本所源光寺の川尻清潭の墓所には、その一周忌に彼が詠んだ俳句『ひつきようは老の気弱の小春かな』の碑があります。また浅草神社にも句碑が建ち『いろはにはへとちり／＼に』が自筆の色紙を拡大して刻まれ、裏には略歴を刻んでいます。

『久保田万太郎ハ東京ノ人 明治二十二年十一月七日生レ 昭和三十八年五月六日ニワカニ逝ク 慶応義塾在学中年二十二ノトキ小説朝顔ノ一篇ニヨツテ文壇ニ知ラレテ以来五十年 小説戯曲及ビ俳句ニ名作多ク前ニ日本芸術院会員ニ選バレ 後ニ文化勲章ヲ授ケラレ更ニ逝去ニ際シ従三位勲一等ニ叙セラレタノハソノ栄トスルトコロト察セラル

久保田ハ浅草ニ生レ 浅草ニ人ト成ル 観世音周辺一帯ノ地ノ四時風物ト ソノ民俗人情ヲ描イタ大小ノ諸篇ハ日本文学ニ永ク浅草ヲ伝エルモノトイウベキデアロウ ココニ有志ノ者等相図リ コノ地ヲトシ句碑ヲ建テテ其人ヲ偲ブ 時ニ昭和四十年十一月七日 小泉信三』

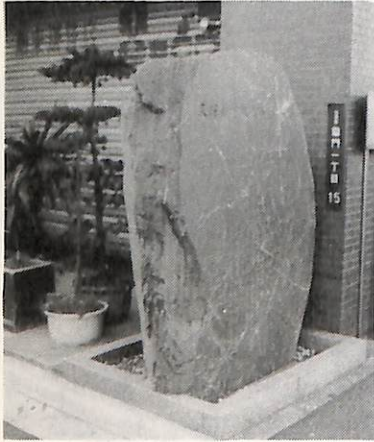
短かい碑文ながら彼のことをよく伝えていますが、その生い立ちや業績をもう少しご紹介しましょう。

① 彼の生家は浅草区田原町三丁目（現台東区雷門一

丁目で記念碑あり）で袋物製造業を営む勘三郎、ふさの長男として生まれ、両親は家業を継ぐことを望んでいました。勿論、大学へやることなど全く考えなかったのですが、祖母の援助で両親に内密で慶応に通うことができました。この祖母がなければ作家万太郎はなかったかも知れません。

② 関東大震災で北三筋町の家を焼け出されるまで、浅草周辺に三四年間も住んでいたという点、下町育ちの作家としての特異性が育まれたのではないでしょう。か。もっとも彼自身は下町情緒とか、下町趣味といったことばで、自分の作品を評されることを大へんきらったようです。

③ 彼は府立三中時代、他の教科は優秀であったのに数学、それも代数だけ点が悪いというので落第させら



万太郎の出生地

れ、慶応普通部に転校し、中三をもう一度経験します。この時のことを随筆『ワッフル』に今までの学校になかった自由の空気に驚いたと書いており、このことから浅草を離れて未知の世界に開眼したと云えましょう。なお、この頃樋口一葉の作品に強く感動したといいます。後年『一葉と大音寺前時代』を書いたり、『十三夜』をラジオドラマに脚色したことが、なるほどと思えます。

④ 彼の文学の中で俳句を第一と見る人も少なくないようです。中学時代に俳句を始め、暮雨、後に傘雨という雅号で句会に出たり、新聞の俳壇にも投句、その実力を認められました。けれども作家を志して自ら俳句を捨て、大正五年に市村座の周辺にいた人々の「句楽会」に参加するまで長く俳句を作りませんでした。

それが昭和二年に句集「道芝」を出すまでになったのは、芥川龍之介との交友からの影響も少くなかったと思います。序文を芥川が書いていることも興味あることです。なお、昭和二〇年には俳誌「春灯」の主催者となります。俳句は彼の才能、技巧を端的に発揮させるのにぴったりの詩形でした。勿論小説、戯曲、特に随筆に勝れたものがたくさんありますが。

佐多稲子

『私の地図の、江戸版画的風景には、三囲神社も書かれている。いつもひっそりとしていた神社だ。淀んだどぶ池のそばに、閉めたままの障子の白さを見せていたのは其角の家だ、と子ども心にも知っていた。もうこの辺りはすでに震災で一変している。このおそろしい当日は私は日本橋の勤め先から歩いて来て吾妻橋を渡り、枕橋では家財を荷車に積んで逃げる人々を押し分けて行った。土手の土が大きく罅割れていたのを見た。この時から隅田川の土手は、昔日のおもかげを消したのである。

私の住んでいた長屋はこの土手下の、かたかたとどぶ板を踏んでゆく路地奥にあったのだが、今はもう見当のつけようもない。向島小梅町と美しい名の所だった。大川さんという、町内で名の知れた実業家の邸の裏手を竹塀ぞいにうねうねと曲がっていた小路、蛇横町を通りぬけていけば、私もちょっとした間だけ通った牛島小学校がある。…略…』

これは佐多稲子の『東京地図』の一節ですが、これ

でおわかりのように稲子は墨田区に住み、学んだことのある作家です。同じ頃牛島小学校の同学年に堀辰雄がいましたが、お互に知りませんでした。

さて稲子は、明治三七年六月一日長崎市八百屋町の叔父田中梅太郎方で生まれました。父、田島正文は県立佐賀中学五年生で一八才、母、高柳ユキは県立佐賀高女一年で一四才という幼い両親でした。それでも周囲の反対を押しきって二人は結婚、前記の所に世帯を持ち、正文は卒業すると、長崎造船所に就職しました。しかし両親が内縁関係のため、ひとまず梅太郎の長女イネとして届けられました。後に実父母の戸籍に養女として入籍します。

小学校の時母ユキを結核で失い、医療費と父の放蕩のため、祖父の相当な遺産も底をつき、家計逼迫^{ひっぱく}。

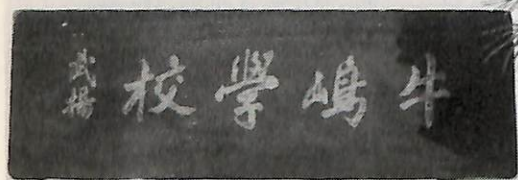
小学生の稲子は利発だが勝気なオテンバ娘でした。反面、毎日のように図書館に通って西洋の童話に熱中したり、中央公論、太陽、新小説などの小説を手あたり次第拾い読みするような少女でした。

大正四年、一家を挙げて上京、小梅町の佐田秀実(父の実弟)の許に寄宿。あてのない上京のため貧乏のどん底に落ち、一ヶ月で牛島小通学をやめ、和泉橋のキ

チャメル工場に通いました。この体験が後に『キャラクター工場から』となって発表されます。

父に定職がないためにますます貧乏して、シナそば屋に勤めたり、料亭に奉公したり苦勞を重ねます。

しかし、一四才の頃二葉亭四迷や国木田独步、高山樗牛、夏目漱石、シェークスピア、ユーゴー等を乱読、見よう見まねで少女少説や短歌を書いて雑誌にも度々投書、いくつかは掲載されました。その後曲折を経て二〇才の時資産家の息子で小堀槐之という慶応の学生



辰雄・稲子が在学した牛島小学校の
篇額（廃校）

と、その頃勤めていた丸善の上役の紹介で結婚しましたが失敗、離婚します。その後、生活のためカフェー勤めを転々しますが、その時知り合った窪川稲次郎と同棲。この頃堀辰雄、中野重治等を知り、その影響を受けたり、エンゲルスやレーニンの著書を次々に読み漁りました。やがて昭和四年には「日本プロレタリア作家同盟」に所属します。軍国主義の道を進み始めた当時の日本の政治情勢の中では許されぬ文学活動として、弾圧に次ぐ弾圧を受けて苦しみます。しかし、そうした中でも新しい作品を数多く発表します。

昭和一五年になると、窪川との家庭生活がゆきづまり、妻の座と作家としての立場との相克に苦しみます。昭和一二年には、文化運動のことで懲役二年執行猶予三年の判決を受け、臨戦体制下でいよいよほんとうに書きたいことは書くことができない状態になり苦しみます。思想的に後退し、戦局に妥協したような作品も書き戦地慰問もします。そして昭和二〇年には窪川と離婚、早世した叔父佐田秀実の籍を起こし、筆名を佐多稲子としました。

昭和三八年『女の宿』で女流文学賞を受賞。現在も健在で執筆を続けています。

永井荷風

『ぼくが死ぬときは、ぼっくりと死にますぜ。そう
なれるように観音さまにおまいりしてきたんですから
ね。出来れば九日という日がいいな。これじゃ欲張り
すぎますかね。森先生（註・鷗外）も上田先生（註・
文学者上田敏）も四月九日になくなられたんですよ。
月は違っても九日に死ねればいいとぼくは祈っている
んですよ。』

荷風は親しい人にじょう談めかして、よくこう語っ
ていましたが、昭和三四年四月三日に日こそ違えほと
とにぼっくりと亡くなりました。荷風の信仰する観音
様とは、勿論浅草の観音様ですが、この信仰は相当年
期がはいっています。明治四一年に外遊から帰った時、
『ぼくが足かけ六年、アメリカとフランスで勉強し
てきた間、無病息災で帰って来られたのは観音様のお
守のお蔭ですからね。だからぼくはいつも観音様を信
用していますぜ』と語っています。

荷風は明治一二年一二月三日、小石川金富町（現文
京区春日二丁目）に生まれました。父、久一郎はアメ

リカのプリンストン大学に留学、文部省の役人として
ヨーロッパを視察し、日本郵船の上海支店長として中
国にも在勤しています。とにかく明治新政府の人材と
して期待された謹厳な性格の人でした。しかも鷺津穀
堂に詩文を学び、明治詩壇にも聞えていたということ
です。母はこの穀堂の娘で、穀堂は明治新政府の要職
にあり、かつ著名な文学者です。母も若い頃から文学
を好み、小説等の蔵書が多く、荷風が中学時代に愛読
した帝国文庫のような大文学叢書も母の蔵書です。

（註・向島の白鬚神社境内には、穀堂の碑があります。）

荷風は一八才の時、荒木竹翁に尺八を習い、岩溪裳
川に漢詩を学びました。二〇才、広津柳浪の門に入り
処女作『簾の月』の校閲を乞いました。この原稿の消
息は不明です。二一才、落語家朝寝坊むらくの弟子と
なり、芸名を夢之助といいましたが、すぐ家人に知れ
て禁足になります。二二才、福地桜痴の門に入り歌舞
伎座作者部屋で拍子木を打つ修業からはじめました。
この頃学業を全く放棄、遊興費捻出のためもっぱら文
筆に精を出し、懸賞金を稼いでいます。

二四才の作『新任知事』は雑誌「文芸界」の巻頭小
説の栄を担い、文学的評価を得ました。しかし、この

作品のモデルは叔父阪本^{さん}之助の知事^{りょうかん}、獵官運動を描いたもので、当時の上流社会としては考えも及ばない思いきったことで、永井家の間で物議をかもしました。しかし、この辺に荷風の文学観がうかがえます。こうして作家への途をひたすらに歩む荷風に父は反対し、せめて実業界で身を立てさせようと、アメリカ遊学へと旅立たせました。二四才からのアメリカやフランス等での生活が彼の生涯に決定的影響を与えました。西洋文化の実体を十分理解し、体得し、さらに熱烈な恋愛も経験して成熟した大人として帰ってきた彼は父の願いとは反対の道を進みます。



荷風が信じた浅草観音さま

彼の文学を御紹介するには余りに紙数が少ないので、墨田区に關係する作品の名前だけでも記します。『百花園・渡鳥いつかえる・向島・向嶋・日和下駄・寺じまの記・すみだ川・おもかげ・濯東綺譚・春情鳩の街・牡丹の客・放水路』等があります。その中から『すみだ川』の一節を最後に掲げておきましょう。

『曳舟通りに添ふ堀割を伝って直ぐさま左へまがると、土地の者でなければ到底分らないほどに迂曲した小径が三囲稲荷の横手から向島の土手へと通じる。小径に添うては、新しく田圃を埋めたてて、まだ人の借りない貸長屋を建てた処もある。広々した構への外には大きな庭石も据並べた植木屋もあれば、全くの田舎らしい茅葺の人家のまばらに続いている処もある。その竹垣の間からは夕月に行水をつかつて居る女の姿の見える事もあった。羅月^{らげつ}宗匠はいくら年を取っても昔の気質は変わらないので、見て見ぬやうに窃と立止るが大概はぞつとしない女房ばかりなのでがっかりしたやうに歩調^{あゆみ}を早めて自分に損も徳もない貸長屋だの売地の札を見る度に、今度は其の方の胸算用をして、自分も懷手^{なつて}で大儲^{もった}をして見たいと思ふ。…略…』

芝木好子

久保田万田郎が浅草に生まれ育った異色作家であつたように、芝木好子も生まれは北区王子ですが、浅草馬道の高級呉服商の家に育った下町の色濃い作家です。浅草田原小から府立第一高女（現白鷗高）Y・W・C・A駿河台女学院英文科と学んでいます。

もっとも祖父富太郎が出京するまでは、石見国（島根県）浜田藩の武士でしたから、彼女には中国武士の血も流れていると言えましょう。

彼女は大正元年五月、芝木倉次郎、か祢の長女として生まれました。父は、日本画・茶道・短歌・義太夫謡曲と実に多趣味の人でした。一方母は実家が化粧品問屋という商家育ちです。こうしたいろいろの条件が好子の人となりに影響を及ぼしたことは推察にかたくありません。殊にその文学的才能は、多趣味の人、父の血ではないでしょうか。

昭和七年八月、豊島区雑司ヶ谷に移りました。父が死亡し、店を閉じるという不運にあい、母と妹達を養うため三菱経済研究所に勤めました。

やがて母も昭和一〇年に死亡、昭和一五年には退職、翌年結婚と一身上に大きな変化がありました。

作家としてのスタートは、昭和一年に雑誌『令女界』へ一五枚のコントを出し、それが林芙美子の選に入り「芙美子賞」を得たことがきっかけです。昭和一五年に『花叢』翌年には『双流』といずれも芥川賞候補となり、同年一〇月には『青果の市』で芥川賞を得ます。この頃は、大東亜戦争の最中で、芥川賞を得たからと云って、次々と作品を書けるという条件になく、思想統制・経済統制は厳しくなる一方で、作家にとって全く制約の多い時代でした。青果問屋の長女八重が、日毎に不自由になっていく市場活動の中で、傾きかけた家運を挽回していくこの物語は、それだけに作者が自己の作品の方向を見出し、その作家的生涯を定めた傑作です。

『青果の市』から

『市場に対する愛情は仲買人全部の心ではないだろう。あの人たちもみんなどうかしてこの難関を乗り越えよう』と必死になっているのだ。子供を抱えた気の毒な△のおかみさんもやはり最後の努力をしているだろう。生きるという大きな現実を困難の中でやりとげられる

のは、働いている人間の強さに俟^{まち}つよりない。

苦しいのは自分だけではないのだ。いざとなったら女だってなんでもしてみせる。八重は十年の月日に培った、生きる逞しさを心の底に感じた。

春とはいえ冷い夜気の中で川風に吹かれながら、八重は癖でショールを搔込み、少し屈み加減の姿勢で気忙しく歩いて行った。』(完)

思うにまかせ

ぬながら、戦中

から戦後にかけ

て、長編『流れる

日』を完成させて

います。然し、

長い停滞期があ

って、昭和二九

年「中央公論」

に『洲崎パラダ

イス』を発表し

ます。これは酌

婦、娼婦、ひょう

客達を飲み屋の



川筋に残る明治の面影 待乳山聖天

店で観察しながら、人間の情念を裸にし、顛落^{てんらく}の女達の生存欲に直接ふれ、人間の実態を知った作品です。作者のような良家に育った女性にとっては思いもかけぬ体験で、ある種の文学的開眼を意味するものです。

昭和三六年女流文学者賞を得た『湯葉』そして『隅田川』『丸の内八号館』は三部作として、明治、大正、昭和の三代を貫く風物詩であり、自伝小説、家系小説で、脂の乗った仕事ぶりを高く評価されています。

なお、昭和四〇年『夜の鶴』で小説新潮賞を、四七年『青磁砧^{せじき}』で女流文学賞を受け、現在も健在で旺盛な創作活動が続いています。最後に『湯葉』の一節。

『ある日、歌は路^{みち}をつれて向島の亮一の出養生の別宅へ行った。二人は須田町から鉄道馬車で浅草まで出た。枕橋を渡って、向島土手からすこしはいった閑静な一帯は寮や別宅が多かった。亮一は二年前に肺を患って以来、療養のため向島の家へしばしば来ていた。

…中略… 二階の手摺からは土手越しに隅田川の広い川面が見えた。対岸は霞んでいたが、待乳山のあたりや五重塔などを路は歌から教えられた。「こっちへくると清々する」歌は川の眺めを楽しんだ。川には舟が往来して櫓をこぐ船頭の姿が流れていった。…略…』

安藤鶴夫

『しあわせな男で、いやな奴とはだんだんつきあわないですむようになった。』

それアこの世の中のことだからいやな奴とまるつきりつきあわないですむというわけにはいかないが、自分からは、そんなのにつきあわないですむようにしている。好ききらいが強い男だからによりそんな風に行けることがありがたいことだと思っている。ある時この世の中で特にわたしがへただと思っているきらいな芸人の細君がやってきた。相談ごとだった。どうすれば亭主がうまくなるかという話なのである。

わたしは相談ごとにはたいはいほろっとする男だが、この時は敢然として、その相談ごとにはならなかった。仕様がねいなといった。それよりほかにいいようがなかったのである。張本人があらわれての上のことならたぶんまたおしゃべりになったであろうが、その細君ではいいようがないのである。…略…』

これは鶴夫の『ある日 その人』という随筆の書き出しですが、鶴夫らしい一面がよく出ています。彼の

文はこういった調子のふだんの話を文章にしたという形式が多く、平易な中に深い味が滲み出ています。

明治四一年、安藤鶴吉・きやうの長男として浅草区向柳原町二丁目に生まれました。父の鶴吉は八代目都太夫という義太夫語りでした。鶴夫も昭和一二年には愛宕山（JOK）から義太夫「本朝廿四孝」を放送しましたが、やっぱり蛙の子は蛙ですね。でも、少年時代に二年ほど山手の私立小学校へ通い「芸人の子」と軽蔑されて口惜しい思いをし、都太夫と言う表札を父に隠れて何回も溝に捨てたと後年の随筆に書いています。しかし成人した彼は芸人を軽蔑したり、低く評価するようなことはなく、むしろ芸人が芸能人なんて言われたがることに強く反撥していました。

小学校は浅草の育英小学校でスタートしましたが、文京区大塚を始めとして、麴町、旅籠町、富坂町など随分居所を変えました。終焉の地は四谷若葉町です。なお新婚一年半で亡くなった最初の夫人と駒形橋の橋だもとの家で生活しましたが、随筆『橋』では、二〇年昔のことがしみじみと回想されています。勤めの往復に病身の夫人が二階から手を振るのを見たのは、この橋の上からだったそうです。

随筆『橋』から

『昭和二年に出来た駒形橋は、その時分、わたしと同じように若々しかったのに、このごろはひどく衰え、みすばらしくなった。』

路面のコンクリートは、たて・よこに大きく長くひび割れ、その割れめに草が生えて、橋ぜんたいいうすぎたなく、すっかりくたびれている。

戦後、長い間

あき家になっていた橋のたもとに駒形橋の派出所が復活した。まるでもう枯れてしまったような赤くはしゃいだ葡萄棚の下で巡査がひとりむつりと車の流れを見ていた。

…略…



町袂の駒形橋を新婚時代を送った夫が鶴

一六才の時、謄写版刷の個人誌「燭淚」に戯曲『簀戸』²一幕を執筆したのが初めて、戯曲を多く書き、また随筆や聞書には味わい深いものを多く遺しています。さらに読物としての『落語紳士録』や短編『寄席紳士録』長編『巷談本牧亭』等のように講談・落語について深い愛情をもった芸談や評論は、読む人の心を深くとらえずにはおきません。勿論邦楽や舞踊・芝居にも詳しく、短編『四代藤間勘右衛門』や菊五郎物語『菊匂う』などを書いていきます。

また、昭和二五年に報知新聞のラジオ評「波長」に執筆したり、ラジオ東京編成局参与となって、開局放送の『風流ばなし第一回パチンコ』を放送、高田保作『青春虚実』の朗読も放送する等、多方面に活躍しています。一方、昭和二六年には日本演劇協会創立に尽力、芸術祭執行委員会企画委員にもなっています。また久保田万太郎に師事した彼は、その全集の編集委員もしています。

こうした巾広い活躍をした彼も、中学時代に数学ができなくて落第したこともあったとか。

惜しくも昭和四四年九月に六〇才の若さでこの世を去りました。

高見順

『巻目の奥深く』

巻目の白い螺旋形の内部の
つやつや光ったすべすべした

ひやつこい奥深くにヤドカリのようにもぐりこんで、
じっと寝ていたい。誰が訪ねてきても

蓋をあけないで眠りつづけ

こっそり真珠を抱いて

できたらそのままちぢこまって

死にたい、蓋をきつくしめて

奥に真珠が隠されていることを

誰にも知らせないで。

―詩集『死の淵より』から―

高見がガンと闘いながら発表した詩群の題が『死の淵より』で『巻目の奥深く』はその詩群の一つです。

死と対決している文学者の不屈の魂の記録として高く評価される詩集の中の一つの詩として冒頭に掲げます。

高見順は、明治四〇年福井県三国町に生まれました。父鈺之助は福井県知事から貴族院議員、枢密顧問官と

なつた名門で、永井荷風の叔父に当たります。この時代の県知事といえば、地方の人々に対しては殿様のような権力者で、その接待の宴席にはべるために選ばれた美少女が高見の母、高間コヨであつたわけで、権力者の一夜の慰みに抗する手だてもないまま、小娘コヨは不幸にも妊娠させられてしまいます。勿論、坂本は子供を認知するどころか置き去りにして東京に栄転し、土地の人々はコヨに同情するどころか、父無し子を生んだ猥らな女として激しく排斥します。やむなく母子と祖母三人で坂本の後を追って上京、麻布に住みますが、坂本家からは月々十円の仕送りだけで、それ以外一切の関係を絶たれます。勿論、邸に出入りなどではできません。こうした酷い仕打ちをされた母や祖母の心中、特に若くして寡婦どうよとなつた母の気持ちわが子にどう反映し、何を期待したかが推察できるではありませんか。こうした出生の秘密が高見の文学に大きな影響を及ぼしたことは当然と言えましょう。ことに坂本の実子が一高、東大とエリートコースを進むのに負けまいと、母や祖母は高見に期待し、その通り高見もがんばってエリートコースに一応は乗りますが、東大では法学部を望む母達の願いに反して、文学部に

進みます。このことがどんなに母達に大きな打撃を与えたかはいうまでもありません。

彼は一高時代に、その求道的精神からアナキズムやマルキシズムの革命思想に強い関心を持ちます。当時のアナキストやダダリストとも交わり、当時左翼劇場と目された築地小劇場にも出入します。然し時代は將に軍国主義に向って急展開していきます。治安維持法の成立等で、愛国心の名のもとにすべての言論思想の自由が抑圧され、左翼的傾向の者は容赦なく検挙投獄されます。勿論高見も検挙され、長期留置の上、起訴保留となりますが、妻愛子にはそむかれます。こう



した時代的背景が高見の文学活動にも多面的な影響を与えます。彼の最初の傑作『故旧忘れ得べき』はこうした中で生まれます。その独得な饒舌体が注目され、人々に共感されます。戦時中は徴用されて報道班員として各地に行きますが、ビルマには丸一年も滞在、ビルマの作家と親交を結び、作家協会結成を援助します。とにかく彼は現代文学の確立と近代文学館の設立（このことで菊池寛賞受賞）という大きな足跡を遺して昭和四〇年、五八才で世を去りました。なお、文化功労者として受賞しています。

『都に夜のある如く』から

『すでに暮色が迫っていて、国鉄の錦糸町駅はラッシュユアワ一の雑踏を見せていた。その広い駅前片隅に地べたにひろげた布の上に古雑誌を並べて売っていた。三十円、二十円、十円の三種で、かたわらのリヤカーには縄でしばった古雑誌が積んである。私とは縁のうすい娯楽雑誌ばかりとはいえ、荒縄でふんじばられた雑誌を見るのは、あまりいい気持がしない。この古雑誌は、読み捨てられたあと、落し紙にでも使われるのだろうか。そうして、あの砂町の消化槽のなかに送られるのだろうか。私達―玉置と私は映画館の間から楽天地にはいつて行った。…略…』

椎名麟 三

『考えて見れば人間の自由が、僕の一生の課題であるらしい』

麟三は小説『自由の彼方』のあとがきにこう書いていますが、これについて佐古純一郎氏は次のように述べています。

『人間の自由、ぼくたちにとってこれほど魅惑的な問題はないだろう。椎名氏の文学が多く読者をひきつけるみなものは、氏が一生の課題とするテーマの魅惑性に因由するのも知れない。

その『自由の彼方』の書き出し。

『僕は、古びた手札型の写真を一葉もっている。上半身を正面からうつした数え年一七才の少年の写真だ。頭は五分刈で、額は後年の特徴をすでにあらわして、広く生え上っている。ねずみにそっくりの眼、だんご鼻、やや大きい口、貧弱な耳、これらが小判型の小さい顔にくっついている。…中略…これが山田清作という僕の少年時代の写真である。だが、この写真が僕であるということに対しては、厳粛に拒絶せざるを得

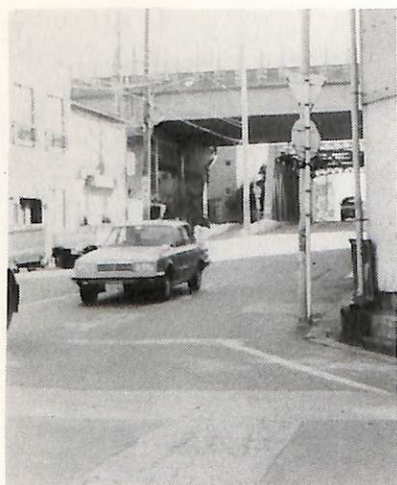
ない。僕はこの写真にだけではなく、僕の一切の過程の写真に対してそうなのである。それらは、いずれも犯罪と死の影をもっているからだ。…略…』

さて、彼は明治四一年（一九一）に父大坪熊次、母日方すみの長男として兵庫県飾磨郡曾佐村（現姫路市書写）の母の里方で生まれましたが、その生い立ちには恵まれませんでした。例えば、生後三日で母が自殺を企てたり、八才の時、両親が離婚、やむなく母と曾佐村へ帰って貧しく暮しました。

一五才の時には、父の約束不履行で生活難に陥り、母に代って大阪の父の所へ交渉にいきましたが失敗。別の女と同棲する父の家にはいられず、といって生活苦の母の許にも帰れず、そのまま家出をしました。見知らぬ土地での就職の途は険しく、様々な職業を転々としながらも何とか自活し、その間独学で勉強し、専門学校入学者検定試験に合格しました。今は知る人の少ない検定試験ですが、容易には合格できないむずかしいものでした。こうした苦しみの中で、次第にニヒリズムの傾向が芽生えていきます。

一七才で宇治川電気電鉄部に乗務員として入社。間もなく労働運動に身を投じ、日本共産党宇治電細胞の

キャップとなって活動を始めます。この頃マルクス、レーニン、エンゲルス等の著作を学びます。思想統制の厳しい時代ですから、昭和六年に検挙され、激しい迫害の中で徴役三年執行猶予五年で刑務所を出たのが昭和八年でした。こうした彼にも春がめぐって、翌九年には祖谷寿美子と結婚、墨田区江東橋四の六に住み、ここを本籍地と決めました。彼は留置所時代からキケルケゴール、ベルグソン、ヤスパース等の哲学書や聖書を読みましたが、新潟鉄工所に入社した頃、ドストエフスキーに強く打たれ、文学に開眼します。後年彼はこう述懐しています。



新婚当時住んだ江東橋あたり

『絶望のどん底において、私の眼を文学へ開いてくれたのも彼であり、さらにその文学における絶望のどん底で、イエス・キリストを指し示してくれたのも彼である』

こうして彼は三〇才で退社、いよいよ文学に専念します。麟三は戦後派作家として、それまでの日本文壇にない特異な存在として毀誉褒貶の渦の中に巻き込まれながらも着実に成長していきます。そして昭和二六年のクリスマスには洗礼を受けます。『私の聖書物語』という書物は、氏の入信記として貴重な文献ですが、ドストエフスキーと私」という講演の次の話も、彼の入信のいきさつを知る上で興味があります。

『私はついにドストエフスキーを信頼して、キリストなんか信じられないままに、自分の全存在をキリストに賭けたといっているではありません。当然、私の受洗は、親友のひとりを怒らせ、多くの人たちの嘲笑をあびました。といって、洗礼を受けたからって、すぐキリストが信じられたわけではなく、一年もたつて聖書を読んでいるときに、ショックとともに「ほんとうの自由」を見たのであります』

正岡子規

『寄隅田川名所恋』から（七草集 女郎花の巻）

秩父てふ峰より出づる墨田川

かぎり知れぬ恋もする哉

向じま花さくころに来る人の

ひまなく物を思ひける哉

あふ時はうれしの森の下露に

また袖ぬらすわかれなりけり

我恋は秋葉の杜の下露と

消ゆとも人の知るよしもなし

子規は向島あたりをこよなく愛し、このような歌を数多くのこしています。明治二年の夏休みには、長命寺桜餅屋の二階に二ヶ月ほど下宿し、自ら月香楼と名付けました。その頃、こんな歌も遺しています。

花の香を若葉にこめてかぐはしき

桜の餅もち 家つとにせよ

しかし、子規は明治三五年九月、三五才の若さで、多くの人々の哀惜の中に死にました。

辞世の句

糸瓜咲いて 痰のつまりし仏かな

子規が眠る北区田端の大龍寺にはその墓石の傍に彼の書いた文を刻んだ墓誌が建てられています。子規はもっともらしい戒名や墓誌などを嫌い、生前から簡素なものを望み、どうしても残すなら、せめてこんなのと自ら書いて置きました。

『正岡常規、又ノ名ハ處之助、又ノ名ハ升、又ノ名ハ子規、又ノ名ハ瀬祭屋主人、又ノ名ハ竹ノ里人。伊豫松山ニ生レ、東京根岸ニ住ス。父隼太、松山藩御馬廻加番タリ、卒ス。母大原氏ニ養ハル。日本新聞社員タリ。明治三十〇年〇月〇日没ス。享年三十〇月給四十圓。』（註・句読点、ふり仮名は筆者）

同じ慶応三年生まれの子規と漱石とは親友ですが、交際を始めたのは二三歳の一月からです。その年の九月、漢文で書いた紀行文『木屑録』の跋（奥書）に子規がこんな意味のことも書いています。

『わたしは東京に来てから数年になるが、いまだに友人が得られなかった。それがあなたという良い友を得て、何とも喜ばしい限りである』子規は漱石を益友として敬愛していました。一方、漱石は子規についてこう語っています。

『非常に好き嫌いのあった人で、滅多に人と交際などはしなかった。僕だけどういものか交際した。一つは僕の方がええ加減に合わして居ったので、それも苦痛なら止めたのだが、苦痛でもなかったから、まあ出来ていた。こちらが無暗に自分を立てようとしたらとても円滑な交際の出来る男ではなかった。例えば発句などを作れという。それを頭からけなしちゃいけない。けなしつつ作ればよいのだ。(漱石は子規主催の句会に出て、多くの秀句を残しています) 策略するわけでもないのだが、自然にそうなるのであった。つまり僕の方が人が善かったのだな……中略…… 半分は性質



子規ゆかりの月光楼こと長命寺桜餅

が似たところもあったし、又半分は趣味の合っていた処もあったろう。もう一つは向うの我とこちらの我とが無茶苦茶な衝突をしなかったのもあろう。』

―お互いの中の純粹な魂と卓越した文学的才能とを認め合っていたからこそ、世にも稀な美しい友情をもつて終始しえたのだらう― 和田利男

子規は、俳句革新を企てて近代俳句の基礎を固める一方、新しい短歌の道にも挑戦、古今・新古今の歌風の徹底的否定と、万葉集歌風の肯定推進ということで、与謝野鉄幹等明星派に対立、根岸短歌会をおこしました。また文章の面でも写生文を提唱して大きな反響を起すなど、非常にエネルギーな文学活動を展開しました。しかし、明治二二年五月九日夜、突然咯血し、肺病だと診断され、やがて病床に伏してついに再び起つことはできませんでした。しかし、彼のほんとうの業績は、その闘病生活から生まれています。病床の彼を中心に句会、歌会が盛んに聞かれたのも、その一例です。かの文豪漱石さえ、子規の影響を無視することはできないでしょう。最後に子規という雅号の由来です。ホトトギスは漢字でかけば子規、その鳴声は悲壮で、鳴いて血を吐くホトトギスなどといわれ、咯血した子規が自ら雅号としたのも故あるかなです。

宇野信夫

『白鬚橋に近い橋場の町で私は育った。』

白鬚橋はその頃木の橋で、橋銭をとったのだから向島に散歩に行こうと思っても、墓口^{むぐち}を忘れると橋を渡ることが出来なかった。もっとも、向島側に橋番小屋があったので、橋の途中迄は行くことが出来た。荷車を引いたり、馬を引いたりした人には、橋番小屋から長い竹竿が出て竿の先の小さな籠^{かご}みたいなものに錢を入れさせる。橋の上から見ると、左手に日活の撮影所（今の白鬚防災拠点の中にあった）の屋根が見えた。撮影所の前には、竹藪や雑木に覆われた伊井谷峰の荒れはてた家があった。

私は木母寺の方までよく散歩をした。…略…『白鬚橋』から

宇野信夫―本名信男は明治三十七年東京に生まれました。慶応大学の国文科を卒業して劇作家となりますが在学中に近松や西鶴に親しみ、処女作は三田文学に発表した『父親』ですが、昭和一〇年九月に六世尾上菊五郎主演で、『巷談宵雨宮』が上演され、これによっ

て新作歌舞伎作者としての地位を固めました。この時から菊五郎との提携がなつて、座付き作者的立場になり、さらに名優菊五郎によって、その作品はますます輝やかしいものになりました。信夫は、自作画文集『むかし下町に住みて』の序文の中で、次のように述べています。

『……幼年時代には画家、少年時代には小説家になろうと志した私が、いつのまにか劇作で世を渡るようになってしまったことだけは、ほんとうのことであります。』

ふるさとへ

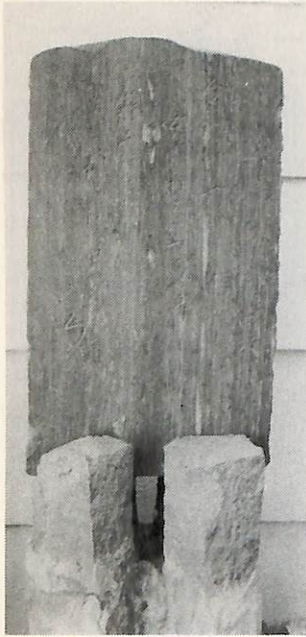
廻る六部は気の弱り

古川柳にそんなのがありますが、十年ばかり前から、子供の時のように、しきりに絵がかきたくなって、よく絵筆をもつようになったのは、自分でも気がつかずに、この川柳のような心境になっているのかも知れません。よく六代目の舞台姿を描きます。それというのが、描いている間は、生涯の恩人である六代目とむかいあっているような気がするからであります…略…』

この短い文章の中にも端的に信夫の人となりや考え方がにじみ出ているように思われます。この画文集に

出てくる絵を見ると、歌舞伎の舞台を見ているような美しさ、やわらかさを私は感じます。歌舞伎は嫌いではありませんが、特別に好きでもありません。でもこの画集を手にとると、いつまでもいつまでもじっと見ていたくなります。信夫が少年時代の夢のように画家になっていたとしたら、どんな絵をかいたであろうかなどとも考えてしまいます。また、信夫は『作者と役者』の中でこんなことも書いています。

『…作家の方は「教え事」ではないかない。奮起したり、昂奮したりして、作品はできるものではない。よく役者の芸談にあるように、先輩から恥ずかしめられて奮いたったり、重度なる修練によって、芸の眼をひらくことができたりする—そんなことは、不可能である。作家に飽くまで冷徹な眼をもって、制作をしなけ



信夫が建てた供養碑

ればならない。つまり芸の道は、ある程度教え事で示すことができるけれども、作家の方は—文学というものは、自分自身で学び、感じ、悟るものでなければならぬ。だから、我々の携わること、弟子の、師匠の—ということはない。…略…』

短い文章のそのまた一部分だけを取り上げたので、意を尽さず、誤解を招きはしないかと心配ですが、信夫の文学に対する姿勢や考え方の一端は理解できるような気がします。さて、墨田区業平二丁目にある日蓮宗の春慶寺は、今、荒れはてた無住の寺ですが、ここに四世鶴屋南北の墓があります。南北といえば有名な江戸期の歌舞伎作者ですが、信夫は墓域を整えて『なつかしや本所押上春慶寺鶴屋南北おくつきどころ』と刻まれた供養碑を自力で建てています。それは南北に対する尊敬の念と、信夫が、『法懸松成田利剣^{りきかけのまつなり しのぶ}』—南北作—から累^{かさね}と与右衛門、その他の人物の名をかりて『小夜衣累草紙』を書いたからだとも言われています。

(註・その後、春慶寺はとりこわれ、鉄筋コンクリートの新しい寺として再建されました。前よりずっと小さくなり、南北の墓碑も新しくなりましたが、供養碑はのこっています。)

谷崎潤一郎

『明治の文壇に於て今日まで誰一人、手を下すことの出来なかった、或は手を下そうとしなかった芸術の一方面を開拓した成功者は谷崎潤一郎氏である。その第一の特色は肉体的恐怖から生ずる神秘幽玄である。第二の特徴は、全く都会的たることである……中略……

最後に特徴とすべき所は文章の完全なることである』

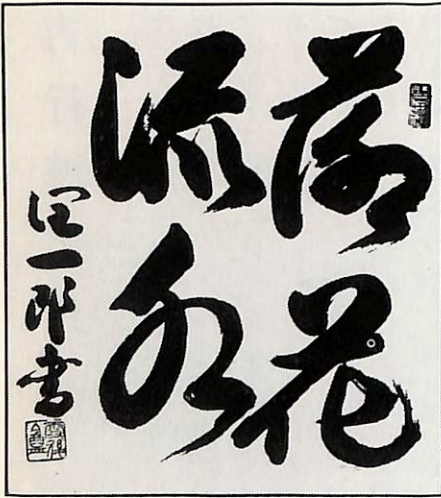
これは明治四四年の「三田文学」一一月号に掲載された永井荷風による谷崎の作品評の一節です。このように激賞されて新進作家として華々しく谷崎はデビューしました。谷崎は明治一九年七月、倉五郎、セキの次男として日本橋区蛸殻町二丁目一四番地（現日本橋人形町）に生まれました。そして二五年日本橋区坂本尋常小学校に入学しましたが、お坊ちゃん育ちで内気だったためか九月から、それもあや付添いで通学するといった有様で、学校嫌いとなり、とうとう一年生をもう一度ということになりました。しかし担任が変わってから、すっかり学校嫌いもなくなり、首席で進級します。その頃家業不振で、南茅場町の裏長屋に転居と

いう悲運にあい、後々まで経済的には苦しい生活が続きます。高等小学校の時、担任稲葉先生の感化で文学へ関心を深め、筆記の回覧雑誌『学生倶楽部』に参加、谷崎花月の名で『学生の夢』などを発表、その才能の片鱗を見せました。稲葉先生の強力な勧めと本人の熱意とで、奉公に出るはずのころを府立一中に進学することができました。彼はここでも成績優秀で、一年生から三年生へと一学年飛びこして進級しました。しかし生活は苦しく、家庭教師兼書生として住込みで学資をかせぎました。

やがて一高から東大へと進みますが、明治四四年に授業料滞納で中途退学を命ぜられます。しかし、一方では、小説家としての基礎をこの時にはしっかり築きあげています。

大正四年二九才の時、石川千代と結婚、本所区向島新小梅町四番地（現向島一丁目）に新居を構えましたが、翌年転居しています。ここで彼の妹林伊勢が兄について書いた本の中から次の一節をご紹介します。『兄は引越しの名人だった。一つの家に二、三年もいるのは長い方であきて来たとすると、もう一日も我慢できないらしく、すぐ家探しに出かけて行く。そし

て北向きの窓のある気に入った家が見つかったとなると、今日も明日もなかった。もちろん家人の都合なぞ斟酌せず、その日のうちに道具屋を呼んで来て、大げさに言えば何も彼も二束三文で売り払ってしまつて、勇躍新しい家へ乗りこんで行く。しかし、自分は何ひとつ手伝つたことはなく、そのうちにどこかへいなくなつてしまふ。そしてみんながくたくたになつてやつと荷物を送り出し、新居へ移り、まだ荷も解かないでいるうちに、ふつとお友達を二、三人連れて帰つてくる。こちらの都合なぞ思つてもみず、新居の披露をするのである。『引越し』から



白筆の色紙

さて谷崎の猫好きも有名で、小説『ねこ』で次のように書いています。

『何といつても面白いのは猫ですね。犬はジャレつく以外に愛の表現を知らない。無技巧で単純です。そこへ行くと猫は頗る技巧的で表情に複雑味があり、甘えかかるにも舐めたり、頗るしたり、時にはツンとすねてみたりして、緩急自在頗る魅惑的です……略……』

谷崎が大変な猫好きなのは、一貫した生来の女性賛美の一表示といえましょう。彼自身、その晩年の作品で「猫好きの人間にはフェミニストが多いと申しますな」と断言しています。これは谷崎文学を知るほんの一手の手掛りとなると思います。

最後に『幫間』の一節です。

『丁度向島の土手は桜が満開で、青々と晴れ渡った麗らかな日曜日の午前中から浅草行き電車も蒸気船も一杯の人を乗せ、群衆が蛾のやうにぞろぞろ渡つて行く吾妻橋の向うは八百松から言問艇庫の辺へ暖かさうな霞がかかり、対岸の小松宮御別邸を始め、橋場、今戸、花川戸の街々まで、もやもやとした藍色の光りの中に眠つて、其の後には公園の十二階が、水蒸気の多い、咽せ返るやうな紺青の空に、朦朧と立っています』

吉行淳之介

淳之介は、大正一三年岡山市桶屋町に栄助、安久利の長男として生まれました。なお、父は新興芸術作家であり、妹和子は新劇俳優で、理恵子は詩人であり、作家でもあるという家庭で、芸術的に勝れた素質と環境に恵まれていたと言えます。

大正一五年父母と共に上京、翌年番町小へ入学、麻布中、静岡高を経て東大文学部に入学しますが、故あって昭和二年中退、ある雑誌の記者となります。

昭和二七年第二六回芥川賞候補として『原色の街』（註・昔の鳩の街が背景）がなったのをきっかけに、『谷間』『ある脱出』と続いて同賞候補となり、ついに『驟雨』で受賞します。自筆の年譜には、この時のことをこんな風に書いています。

『この年も依然として病臥。たまたま芥川賞を受けたので、文筆で生計を立てることに決心した。もともとと文学で生計は立ちにくいと考えていたし、自分の文学的才能の型からみても生計は立ちにくいと考えていたのであるが、それより他に方法のないところに追い

こまれた。』彼はこの頃肺を患い、清瀬病院に入院、療養生活が続けていました。その後、新潮社文学賞、芸術選奨、谷崎賞、読売文学賞等を受賞、更に各種文学賞の選考委員にもなります。

ここで奥野健男の吉行文学についての小論の一節を御紹介します。

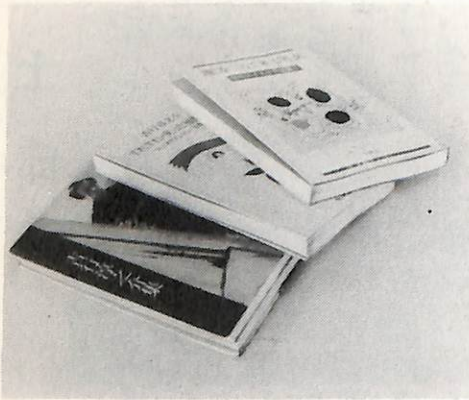
『「原色の街」は当時誤読されたような娼婦の街の風俗小説ではない。あれから十数年たった今日読んでも少しも時代的古さを感じさせない。どんなすぐれた作品でも風俗を描けば、その部分に時代を感じさせるものだが、全然そういうところがないということは、少しも風俗が描かれていないということだ。書かれているのは、男と女の生理と心理の微妙な背反と合致という非時代的テーマだけである。

「この作品の背景はいわゆる赤線地帯であるが、その場所の風俗を書こうと思ったわけではない。この時まで私はこういう地域に足を踏み入れたことは二、三度しかなかったし娼婦に触れたことは一度もなかった。私の意図の一つは、当り前の女性の心理と生理のあいだに起る断層についてであって、そのためには娼婦の町という環境が便利であったので背景に選んだ。意図

のもう一つは、娼婦の町に沈んでゆく主人公に花束をささげ、世の中ではなやんでいるもう一人の主人公の令嬢の腕の中の花束をむしり取ることであった。善と悪・美と醜についての世の中の考え方にたいして、破壊的な心持でこの作品を書いた……略……（私の文学放浪——吉行淳之介）

つまり「原色の街」は観念小説なのだ。娼婦の街という極限的な状況を舞台にした女性の心理と生理の探求である。既成の道德観念を転倒させようとした反逆の書である……略……

『原色の街』から



『隅田川に架けられた長い橋を、市街電車がゆっくりした速度で東へ渡って行く。その電車の終点にちかい広いアスファルト道の両側の町には変った風物が見えるわけではない。ありふれた場末の町にすぎない。

商家女房風の女が、エプロン姿で買物籠を片手に漬物屋の店さきに立止まり、樽に入っている白菜を指さきでひっぱって漬かり加減をしらべている。漬物屋の隣の本屋では、肥満して腹のつき出た主人が店頭の雑誌にせわしなくハタキをかけていたが、その手をふと止めて呆んやり空を見上げている。空には夕焼雲のほかも見えていない。大きな手に握られたハタキが地面に向ってだらりと垂れている。

本屋の隣は大衆酒場で、自転車、五台、それぞれ勝手な方向をむいて置かれてある。その酒場の横に小路が口をひらいている。それは極くありふれた露地の入口である。しかし、大通りからそこへ足を踏み入れたとき、人々はまるで異った空気に包まれてしまう。……略……

最後に彼の作品『童謡』が中学三年用のある教科書にのっていることをつけ加えておきましょう。病気の少年の微妙な心理を描いたすぐれた短編小説です。

尾崎士郎

墨田区のシンボルと云えば、両国の国技館（今は壊されている）で、それを尾崎は題名にして『小説国技館』を書きました。次はその一節です。

『戦争直後である。新秋の残暑のきびしい日だった。大川端は、どこもかしこも荒涼とかすんでいたが、あるとき、友人の若い実業家に招かれ、川岸の焼あとにぼつんと出来たバラック建ての、それも戦前は名前のとおった大きな待合が、やっと二間か三間の家をつくって、ささやかな料理の店をひらき、古い馴染客を相手に商売をはじめたばかりのところへ招待された。

私の通されたのは川とすれすれに濡れ縁のつき出している六畳の部屋で、そのとき何気なしに眼をあげる、と、右手に見える橋の向うに、ペンキの新しい建築のそびえているのがどうにも昔の国技館らしいので、そのとき傍にいた女中に、それとなくきいてみるとやっぱりそうだった。…略…』

さて、尾崎士郎は、明治三一年愛知県幡立郡横須賀村に喜三郎・よねの三男として生まれました。七人兄

弟でしたが、四人まで夭折、長兄は自殺、家は倒産ということで、家庭的には恵まれた方ではありませんでした。これが彼の人生観、文学観に大きく影を落しています。ところで尾崎秀樹は、士郎の歴史小説についていろいろ書いていますが、士郎を知る上で興味ある小文があるので、その一部をご紹介します。

『大正一四年頃尾崎士郎が「尊敬する歴史上の人物・憎悪する古今の人物」というアンケートに答えた短い文章がある。それを見ると尊敬する方に文覚上人、石川五右衛門、平賀源内、高山彦九郎、日本武尊、明智光秀、西郷隆盛等の名前があがっており、嫌いな方には「歴史上の人物は何らかの意味で大抵好き」とことわり書きをした上で、明治維新の頃出没した気どりの志士と義経、道鏡、家康などを列記している。

尾崎士郎の文学には清濁合せ呑むような人間的スケールの大きさがある。それはもともと人間とは立場を変えて観察すれば、善にも悪にもとれるものだといった相対主義的な人間解釈が横たわっていることのあらわれである…略…』

尾崎士郎が昭和八年都新聞に連載を始めたのが『人生劇場・青春篇』ですが、以来二〇数年間にわたって

断続的に書かれ、昭和三四年小説新潮に『蕩子篇』が連載されて終わっていますが、それぞれ舞台も筆致も異なっています。彼の代表作の一つと云える長篇大作ですが、一般的にいう長篇小説とは、ちょっと趣を異にしています。この大作を映画化したのは有名な映画監督内田吐夢ですが、彼は『尾崎さんと相撲甚句』という随筆にこんなことを書いています。

『尾崎さんは人前で平気で裸になる癖があった。本人は大まじめだからだれもそれに抵抗できない。裸になつて相撲甚句をそれはもう調子っぱずれの声で歌い始めるのだった。それから士俵入り、仕切りのポーズ



士郎作品中の国技館も今は消えた

をとる。その格好が豪放でちょっとユーモラスで、ちょうど中川画伯描く挿絵を彷彿とさせるのだった。

このように尾崎さんはどんな突飛なことをやっても、それが豪放磊落^{たうたつ}男性的で憎めなかった。天真爛漫で人の話を素直に受けとり、裏からものを考えたりしない人だった。思えば尾崎さんのような人間をほんとうの自由人と言うのかも知れない。…略…

尾崎の文学を知る上で、彼が「昭和名作選集」に自ら書いた序文が参考になると思つて一部取上げてみました。

『ある時期において私は人生派の作家として遇せられたことがあり、それが次の時期においてはユーモア作家ということになり、浪漫派だと云われたこともあれば、自然主義の垂流^{しりゅう}だと貶^{おとし}されたこともある』

批評家たちの恣意^{ししい}気ままな論断をいささかの噴瀝^{ふんれき}をもつてこう書いたのでしょうが、実際に尾崎の文学には、多彩な傾向と特質が混在していたと考えられます。なお、彼は昭和三九年に癌で亡くなりますが、文化功労者として表彰されています。

北原 白秋

『片恋』

あかしやの金と赤とがちるぞえな

かはたれの秋の光にちるぞえな

片恋の薄着のねるのわがうれひ

曳舟の水のほとりをゆくころを

やはらかな君が吐息のちるぞえな

あかしやの金と赤とがちるぞえな

曳舟川が区内をまだ流れていた頃、白秋が書いた詩で、道路となつてしまつた現在、この情趣を偲ぶよすがは何もありません。白秋は明治一八年に福岡県沖端村石場（現柳川市沖端）に酒造業を営む長太郎とシケの次男として出生、長男は夭折しているので、實際は嫡子として育てられました。本名は隆吉といい、豊かな家庭にトンカ・ジョン（大きい坊ちゃん）と呼ばれて幸せに育ちました。この店の様子を白秋はこんな風に書いています。

『南町の私の家を差覗く人は、薊や蒲生英の生えた旧い土蔵づくりの朽ちかかった屋根の下に、渋い店格

子を透いて、銘酒を満たした五つの朱塗りの樽と、同じ色の櫛のいくつかに目を留めるであらう』

一六才の時この店も酒蔵もすべてが沖端大火で灰となりはてます。一九才で早大英文科入学、若山牧水等の後年有名になった歌人・詩人が同級生となりました。翌年長編詩『全都覚醒賦』が早稲田学報の懸賞一位となり、詩壇の注目を浴びます。そして三二才、江口章子と結婚しますが生活は窮乏の極です。

米櫃に米のかすかに音するは

白玉のごと はかなかりけり

と詠み、その米を雀に与え、飢えながら雀と哀歎を共にする日々でした。三三才、鈴木三重吉の「赤い鳥」創刊にあたり童謡面を担当、数々のすぐれた童謡集も発行。さらに日本が誇る作曲家山田耕作と「詩と音楽」を創刊、白秋の童謡が広く人々に愛唱されるようになります。次は白秋の童謡論の一節です。

『童謡の作者は子供時代の純真な感情や感覚をいつまでも忘れないでゐられる人でなければなりません。大人の詩を作るやうな気持ちだけでは失敗します。もともと童謡といふものが子供の感情から生まれて出た言葉なり謡なりですから、ただ詩らしく作りすぎては

いけないのです。全然子供になってしまふことが必要です。…略…」人々に愛され、親しまれた多くの童謡の中から一つ、二つ。

『雨』

雨がふります　雨がふる
遊びにゆきたし　傘はなし
紅緒の木履も緒が切れた

…略…

『あわて床屋』

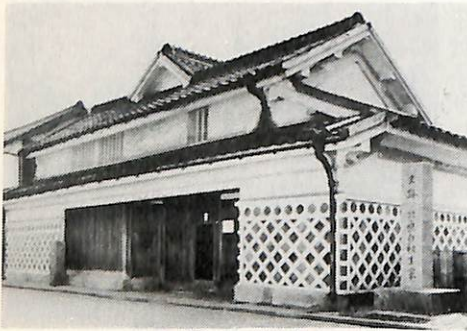
春は早うから川辺の葦に
蟹が店出し　床屋でござる

チョッキン　　チョッキン
チョッキンナ　…略…

これはまた、かつて
の隅田川の土手を偲ば
せませうね。

タンポポや桜が咲き、
葦が緑の風にそよいだ
頃を。

最後に詩人萩原朔太
郎氏の白秋印象記をご
紹介しましょう。



白秋の生家

『北原氏は私の知っている範囲で最もよい感じをもった人です。あの人の感じを一言で言えば「ふつくりした人柄」でせう。私のやうないらしい性格の人間は、一般に人嫌ひが多いので、友人というものがめったにできません。たいていの人とは逢っても落着いて話ができません。然るに北原氏には私のいらいらがたつぷり這入るだけの余裕があります。ですから私はあの人と話をしてゐるときが、心が落着いていちばん楽です。…略…』

昭和一七年、白秋は病気のため、惜くも五七才で世を去りますが、その死の一ヶ月ほど前に病床で書かれたのが田中善徳との共著、水郷柳河写真集『水の構図』の序文です。恐らくこれが絶筆でしょうが、『水郷柳河こそは、我が生れの里である。この水の柳河こそは我が詩歌の母体である。この水の構図、この地相にして、はじめて我が体は生じ、我が風は成った。』と書き起され、故郷を思う心が切々と述べられています。まさに死を前にして、白秋のすべてが凝集されたとも言えましょう。

圓 地 文 子

圓地文子は、明治三八年に浅草区向柳原二丁目（現台東区）に上田萬年^{マンネン}、鶴子の二女として生まれました。本名は富美、父は東大教授であり、国語学の大家として業績を挙げただけでなく、新体詩も作り、文学に造詣深く、斎藤緑雨とも親しく交わりました。上田家は芝居好きで、文子は幼少の頃から歌舞伎に親しみ、祖母からは馬琴の『八犬伝』等や浄瑠璃・歌舞伎を聞かされて育ちました。また文子は小学校上級で『源氏物語』を読み始めていますが、この文子が父について書いています。

『私の父も大学を出た後、博言学（言語学）の研究にドイツとフランスに五年間留学している。現代の洋行とは違うし、風俗習慣のかけ離れたヨーロッパでの生活は、学問への情熱と同時に多くの異種な刺激を青年の心身に吹き入れたに相違ない。そのことは、日本へ帰った後の生活にも有形無形の影響となって現われていると思う。私がそのことを今になって身にしみて感じる一つは、女というものを家の中に閉じこめるこ

とに飽き足りないものを父自身が持っていた点である。現在から見れば別に不思議のないことだが、明治の中期から大正へかけての一般の中流家庭では、娘の将来はほとんど妻となり母となつて、家庭の主婦となることを約束されていた。その時代に特殊な技能や教養を身につけることは異端とされていた。そういう社会環境の中で私のように何一つ、花嫁修業もせず、好き勝手に本を読んで、小生意気な理屈を並べる娘はとんでもない変りものだったわけだが、父は一向気にしないばかりか、むしろ私のそういう性行を助長する傾きさえあった。末子で甘やかしたせいもあったが、家庭婦人でない別の何かに私になることを嫌っていなかったことは事実だった。『おやじ萬年』から

文子は大正七年日本女子大付属高女に入学、独得の校風が気に合わず学校の授業よりもボー、ワイルド、泉鏡花、永井荷風等の文学の他、芝居に親しみます。そして四年で中退、英・仏・漢文をそれぞれ個人教授で学び、新劇にも興味を示します。やがて二一才の時、演劇雑誌『歌舞伎』の一幕物喜劇募集に応募『ふるさと』が岡本綺堂、小山内薫の選に入ります。後に小山内に師事し戯曲を数多く発表します。昭和三年、藤森

成吉、林芙美子等と知りあい、プロレタリア文学の影響を受けたり、小説への開眼もします。やがて圓地與四松と結婚、夫の理解もあり、作家活動を続けます。

昭和二十一年、癌のため入院、生死の危機を幾度か克服して健康を回復します。しばらくは創作の筆は鈍りますが、やがて目覚ましい文学的開花をとげます。昭和二十九年『ひもじい月日』で女流文学者賞受賞を初めとし『女坂』で野間文芸賞『なまみこ物語』で女流文学賞『朱を奪うもの』で谷崎潤一郎賞『遊魂』で日本文学大賞と多くの賞を受け、芸術院会員にも選ばれ、現在も活躍中です。



氏子文地圓

その作風は谷崎潤一郎の系譜に属すると言われますが、女性を見る眼が正反対と和田芳恵は書いています。ただ耽美的という意味では共通性が見られ、谷崎の死後は、谷崎的匂いを濃くしたとも言われています。

最後に『人形姉妹』の一節

『「ああ、あなたあつちですか。珍しいっていつちや失礼だけれど、下町も本所深川なんて黙阿弥の芝居に出てくるようなところの方の人は、私の知り合いに多いんですよ」

「工場地帯ですから：それに水も出ますしね。いい所じゃありませんわ。私の家も、もう今は横網にはないんです」

「横網ですか：あそこには昔、××銀行のＹさんのおうちがあったでしょう。私、行ったことはないけれど、本所の内では落着きたいところしいわね。：おうち何をしていらっしたの」

こんなことをきくのも東京者の癖である。漱石の『吾輩は猫である』の中に「天璋院様の御祐筆の妹のお嫁に行った先の誰々の何々」という系図書きを述べ立てる琴のお師匠さんが出て来るが、全くああいいう戸籍調べの癖は東京者にはあるので、私も一度男の友達に「うるさいね、あんたは」と叱られたことがあった」

林 芙美子

『りよと留吉が浅草へ出たのは二時頃であつた。駒形橋の見える方へ出て、河添いに白鬚の方へ歩いた。

ここが隅田川と云うのだろうと、りよは青黒い海のよ
うな水を見て歩いた―もしもの事があつて、子供が出
来たら困ると云つたら、鶴石はどんな責任でも負うか
ら心配しないでくれと言つて、あの朝別れる時に、鶴
石はりよに、毎月貳千円ずつ位は自分にもめんどうを
みさせてくれと言つた。鉛筆をなめながら、小さい帳
面にりよの稲荷町の住所を書きとめていた。…略…』

『下町』から

これは下町に住む貧しい人達の戦後の一時期のな
しい生活が圧縮された芙美子晩年の短編小説ですが、
彼女はこれを書いた二年後に短い波瀾にみちた人生
を四八才で閉じています。芙美子は明治三十六年末に山
口県下関市―一説では門司の間借の部屋で宮田麻太郎
二二才、林キク三六才の長女として生まれました。キ
クはそれまでに結婚経験があり、何人かの子供を生ん
でいます。芙美子の書いた『放浪記以前』によると、

『私は宿命的に放浪者である。私は故里を持たない。
父は四国伊予の人間で、太物行商人であつた。母は九
州桜島の温泉宿の娘である。母は他国者といつしよに
なつたと云うので鹿兒島を追放されて父と落着き場所
を求めたところは、山口県の下関と云う処であつた。

…略…』 麻太郎は商才があり、店舗をもち繁昌しま
すが、芸者を家に引き入れたり、夫婦仲にひびが入
り、キクは娘を連れて家を出ます。しかし、翌年には
宮田の店にいた二〇才年下の沢井と結婚、九州を行商
して歩きます。芙美子も小学校へ入学しますが、行商
で宿が定まらず、十数度転校します。次第に学校嫌い
になり、自分も炭坑の町を行商します。

やがて一二才の時、一家は尾道市に落着き、翌年彼
女は五年生に編入、ここで若い小林先生に文学的才能
を認められ、物心両面の援助を受け、その尽力もあつ
て尾道市立高女（現東高校）に入学。アルバイトをし
ながら通学します。周囲は恵まれた家庭の娘たちの中
での孤独な学校生活ながら、彼女の一生の中で一番落着
いた時代でした。彼女自身、尾道七年間の生活を一番
なつかしんでいます。

一九才で卒業すると、岡野軍一（明大商科三年生で、

初恋の人」を頼って上京、その下宿小石川雜司ヶ谷付近に住み、生活のため錢湯の下足番を振出しに職業を転々としながらじつと貧乏に耐え、岡野との結婚を夢みます。しかし彼は卒業すると彼女を捨てて故里因島へ帰ってしまいます。この頃から日記をつけはじめ、これが後の『放浪記』の母体となります。二一才、詩や童話を書いたり、詩人と交際したりしますが、書くこと、特に詩作に熱中。この頃新劇俳優田辺と数ヶ月同棲して別れ、男性遍歴が始まります。二四才の時、画を修業中の手塚緑敏を知り、その人柄に惹かれて結婚します。緑敏がいたからこそ、芙美子は作家として成功したのだといわれるほど、彼女を内面から支えた



芙美子が最もなつかしむ尾道

人です。芙美子の多くの作品の中で代表作といわれるものに『放浪記』『浮雲』『晚菊』があり、ニヒルな中に底抜けに明かるい『放浪記』、虚無感がはつきり出てきたのが『晚菊』『浮雲』だとも言われています。平林たい子は『浮雲』を書いただけでも芙美子は生まれてきた甲斐があったと讃辞を送っています。

また、たい子はこうも書いてます。

『彼女のような生き方は市井に生まれて、市井に死んで行った名もなき人妻などにはあるかも知れない。が、これだけの才能をあゝ環境の中に育てて、その環境を文学の肥料とした女性は、日本文学史はじまって以来である。…略…』

今では想像もつかないほど庶民の生活は貧しく、軍国主義の重圧に人権が抑圧された時代背景を考えるとこの平林たい子の文章がいつそうの重みをもって実感されてきます。

最後に東桜島故里温泉にある彼女の文学碑に刻まれた芙美子の好んだ詩を記します。

『花のいのちは みじかくて

苦しきことのみ 多かり』

筆者のことば

「墨田区ゆかりの作家」を「社会教育だよりすみだ」に連載したのは、昭和51年11月発行の第2号から昭和56年2月発行の第27号まで、実にあしかけ6年間でした。ふとしたことで執筆をお引受けしたものの、文才もなければ、学識も浅い私にとっては大変な難題でした。それにスペースも少ないので、そうした中に何を盛れば読む方に満足していただけるかが悩みでした。

しかし、皆さまから温かい励ましのことばやご叱声を受けてどうにか責を果してまいりました。今、多少の補筆、訂正を加えて小冊子にまとめました。

江戸時代から多くの文人墨客が集った向島のすばらしい文学的風土の中に、明治から大正にかけて近代日本文学のすぐれた作家や作品が生まれ育っていきました。この小冊子が、そうしたふるさと墨田を知る一つの手がかりともなれば望外の幸せです。

なお、多くの研究者・評論家・作家の方々の高説を部分的に引用させていただきましたことを、紙上を拝借して厚く御礼を申し上げます。

社会教育課 社会教育指導員

水谷 五郎

すみだ ゆかりの作家

発行 昭和五十九年三月

編集発行 墨田区教育委員会社会教育課

墨田区横網一ノ六ノ一

電話(六二六)三二五一

印刷所 合同印刷株式会社



墨田区立八広図書館



51 058250

改

0.2

区